

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十一卷

第十号



10

日本幼稚園協会

豊かな保育の世界が ここに始まる

保育カリキュラム資料〈全6巻〉

1…春 2…夏 3…秋 4…冬 5…遊び 6…小事典
B5判 136頁 各600円（送料110）



《春》《夏》《冬》 好評発売中!!

続刊予定 〈秋〉 〈遊び〉 〈小事典〉

子どもは一時としてじっとしてはおりません。その一瞬一瞬を力いっぱい活動し生活しているのです。せっかく苦心して作り上げたカリキュラム表も、あっというまにくずされることもしばしばです。

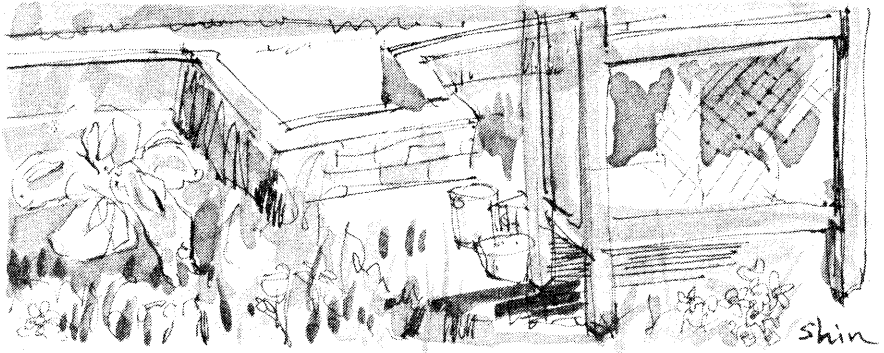
そんなとき、いつ、どこでもすぐに役立つのがこの資料集です。あしたのカリキュラムのためのヒントを集めた、あなたのための保育ハンドブックです。

株式会社 **フレール館**

幼児の教育

第七十一卷 第十号





幼児の教育 目次

——第七十一卷 十月号——

表紙 園房江
カット 斎藤信也

ビルの壁をながめて.....谷田 闕 次(4)

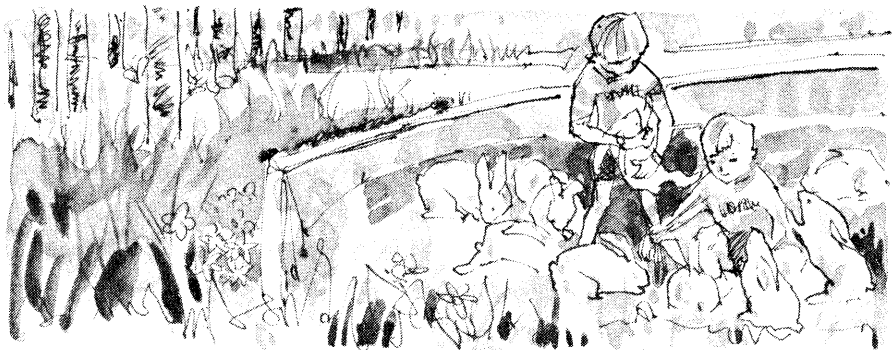
木材の話.....山本 孝(7)

——山本孝先生をかこんで——

山本 孝(7)
周郷 博
田口 恒夫
津守 真ほか

自然のあそび.....加奥 愛子(31)

私の保育.....新井 芳(36)



幼児教育とは何か……………関口 はつ江 (40)
— 幼稚園の意義を考える —

育児生活をかえりみて……………清水 美代子 (46)
字の無い日記……………降 矢 震 (53)

倉橋賞を受賞して……………堀 端 孝 治 (58)
小児の精神発達に関する追跡研究……………堀 端 孝 治 (59)

洋書紹介……………江 波 諄 子 (68)

ビルの壁をながめて



谷 田 閱 次

私は日ごろものの形について考えることを仕事にしているの
で、なにか唐突なことを言い出すようであるが、この日ごろの
感想を語ってみたい。

今日、町を歩いていて目に触れる大小の商業的な目的を持つ
建築、それから新しく次々に建設されてた皆さんの人々がその
中に住む高層の住宅建築、こういつた建築の内部に入るまでも
なく、外からそのそそり立つ壁面を眺めただけで、それらの建
物には一つの著しい共通点のあることが目につく。それはその
立面が一定の単位の規則正しい繰り返しによってみだされてい
るということである。たとえば大きいビルの立面を眺めると、
その広い面の左の端から右の端まで、また二、三階のあたりか
ら十数階、さらには四十数階になるその最上階まで、そこには
平均した単位の繰り返しだけがある。

もちろんこのようなことは今日にわかに起こったことではな

い。ニューヨークの国連本部のビルが建つたときに、このビル
は**節の目建築**と呼ばれたものであった。その呼び名はいうま
もなく同じ大きさの窓が**節の目**のように規則正しく繰り返しされ
ている印象を言ったものである。そのころはことさらにそのよ
うな呼び方がされたことでもわかるとおり、まだ建築の立面と
してやや目新しくもあつたのである。

今日になって見ると国連ビルの立面どころではなく、もつと
単純化された単位の繰り返しが日常のものとなつてい
てこのような立面を持った建物は、たとえその大きさを半分に
切つて見ても、高さを四分の三にとどめてみても別にどうとい
うこともない。単位の数が減るだけであつて、そのために全体
にどういうゆがみが出て来るわけでもない。

かつての建築はそういうものではなかつた。ヨーロッパ文化
の中のものだけについて見ても、建物には、したがつてその立

面にも、中央の部分があり、側翼の部分があり、主たるものがあり従たるものがあった。それゆえに、一つの建物の立面はそれぞれ固有の統一を示し、全体は有機的に組織を示していた。少なくともそれを示そうと努力していた。この場合には、建物の幅を半分^に切ったり高さを四分の三に縮めることは不可能である。そのようなことをすれば統一は失われ、有機的な組織はばらばらになり、建物の生命はあとかたもなく失われてこまるだろう。

建物の立面が一定の単位の集合から成っているということは、もちろんその背後に、文字通り立面の背後に建物の中の生活、広い意味での生活があること、その生活の反映であることは明らかである。私の感想は当然そのことを含めてのものであるが、何よりもまず気になるのは、全体とは単位の集合、しかもいわば算術的な集合にすぎない、というあり方である。

単位とその算術的な集合がそのまま全体であるということに對しては、すでにル・コルビジェが一つの是正を主張した。前にあげた国連本部の建築に際して、彼は自分の考案した一種の比例尺の採用を主張したが、他の人々にいれられなかったという挿話がある。彼のいう比例尺は、現代建築が陥っている欠点を救うために、人間に即した寸法を基にして、これにある比例的变化を加えようとするものである。設計そのものにおいてそ

の理論がどれだけ成果を収めたかはやや別の問題であるが、彼の出发点をなしたものの、すなわち人間と無関係なメートルという尺度と算術的な単位の繰り返しへの反省は私たちに多くのものを示唆する。

少しわき道に入るようだが、ここで少し尺度というものについても考えてみよう。かつてはものさしというものは人間の身体と結びついていて、それは手だの足だの、また両手を広げて届く幅だのに関係していた。それゆえに歴史的なものさし、それぞれに生まれた土地を持つものさしは、互いにおよそは似通っていて、しかし少しずつ違うものであった。それはいろいろな郷土の人間がおよそは似通っていて、しかし少しずつ違うこととの現われにほかならない。近代初頭の合理主義から生まれたメートル法は、もはやいかなる人間の身体ともかかわりがなく、それゆえにこそすべての人間に共通であり得るようになった。しかしそのような考えは根底において何かを欠いているように思える。少なくとも造形の世界においては、人間そのものの表現の世界である造形の世界においては、誰のものでもないものは最後まで誰のものでもなく、誰のものでもないゆえに万人に共通なものになるといふような望みは持てない。ル・コルビジェの主張はこの点にもあった。

個性と共通性、郷土性と世界性との関係は、特定の個性をも

たないから共通性を得るとか、特定の郷土性を持たないから世界性があるとかいうものではない。むしろどこまでも个性的で、どこまでも郷土的であるものが、そのあり方で広い共感を得たときに、初めて世界性、共通性を得るのではないか。

もとの問題に戻ろう。私の出発点はビルやアパートの立面にあった。平等な単位の連続だけが全体を形づくるという今日の建物の立面の性格は、言いかえればかつての建物が持っていた有機的な全体、統一を持っていないことである。多分、このような言い方に対しては、単位の連続、その同じ立場、資格での並立こそが全体であるという反論があるだろう。しかしそれは私にとってはあまりにも形式的な反論であるように思える。どこで切ってもよく、逆にまたもつといくらでも続けてもよいというような全体というものはあり得ないだろう。

さて、私にとっての本来の問題は、そのような建物の立面が示す、あるいは象徴すると言ってもよいような、心のあり方である。私たちにあって形とはいっても心の具象化であり、心とは形の抽象であるから、そのような単位と全体のあり方は、とりもなおさず心の姿として考えられるほかはない。

近世以来のものの考え方の根底には、いつも分析されお互いから孤立してしまった諸価値と、そのような諸価値の単なる並列との姿がある。長い間私たちはそのようなものの考え方に慣

れてきた。そして人々はそれを価値の自律と呼ぶ。近代の思想は分析された諸価値の自律を極限にまで追求し、そのようなあり方を謳歌してきた。私たちの心はいわばそのように追求された互いに無縁な諸価値が一つずつの単位として並んでいるだけのものになりかけているのではないか。それは今日の建物の立面と同じように、もつと数多く継ぎ足されてもよいし、しかしまたどこかで断ち切られてもよい、そのようなものでしかないのではないか。しかもその各々の単位を形づくりそれが測られるのは、そもそも人間と無縁なメートルという尺度によってである。

私は少しおしゃべりをし過ぎたようである。私はただ毎日目に触れる建物の立面、中心もなく方向もなく、個性のない単位の羅列にすぎない建物の立面についてだけ語っておけばよかったかもしれない。しかしことに近ごろ、それらの建物の姿はもつと複雑な意味を伴って私の心を重くさせるのである。

中心もなく方向もなく個性もない、そのような形を生む心、そしてまたそのような形の中で育って行く心。そうしたことについて私なりの考えをこれからも追って行きたいと思う。

(お茶の水女子大学)

木材の話

—山本 孝先生をかこんで—



山本 孝
周 郷 博
田 口 恒 夫
津 守 真
ほか

山本 木材の見本をもってきましたから、皆さんであってください。(皆で勝手に木の名前を言い合う) でたらめでもよいですよ、木材のことを専門に勉強している学生でもなかなか全部あてるのはむずかしいのですから。(笑い声)

津守 田口先生はよく知っておられますよ。

田口 私はお茶大にある木しかわからないんですよ。(見本の木材片のにおいをかきながら) これはヒノキだ、においをかけばわかる。

山本 田口先生だけがにおいをかいであてられましたね。ほかの皆さんはにおいをかぎなかつた。

ね。一本の立木のなかでも、その木の部分によって色も違うでしょう。心材と辺材と言うように。同じヒノキでも立っている土地、やせ地とか肥沃地とでも違うように。皆さん方は目で観察されましたね。色や木目のようすで判断されました。そして持つてみて重さ(密度)も検討したわけです。田口先生がにおいというもう一つの情報を加えられたのは優等生ということになりますね。(笑い声)

山本 この部屋に使ってある木はわかりますか……? 間じきりに使っているベニヤ板(正確には合板という)はブナです。ブナは日本の寒い地方、北海道や東北の山地にある広葉樹です。今では太いブナ材が少なくなりましたから、貴重品になってきました。それからブナ合板のまわりの椶木スギはスギです。その下のはめ板(腰板)はヒノキです。全部日本産の木です。

机について

この机（黒くよごれた方）とその机（比較的新しい机）と比べて、皆さん方はどちらの方が好きですか。この机は大分荒っぽく使ったとみえて、この辺は少しこげたようになってますね。

（笑い声）ただこの机は日本産のナラ、その机はラワンです。この机はナラのまきめ（柾目）木取ですから値段で言うと同ワンの十倍もするでしょうね。

（一同のためいきがきこえる）

周郷 『何の木か』という知識じゃなくて『ぼくはこの木が好きだ』という方がいんじゃないですか。

山本 そういう考え方をする人がもっと多くなってほしいですね。値段の高いのがいいというのは、どうかと思いますね。

田口 今、お茶大では部分的に修理中なので、大変貴重なものをいっぱい捨てるんですよ。それをぼくは夢中で拾うんです。

山本 ではもう少し机の話をしましょう。この机の上でお茶をひっくりか

えすと、あわててふかなくてはなりませんね。もしメラミン化粧板だったらあわてなくてもよいでしょう。そして

土瓶敷はいらなけれど、この机には必要なんですよ。（笑い）メラミン化粧板だったら（ナラの机の表面の塗料が

白くなった跡をゆびさして）こんなことにはならない（一同大笑い）昔の塗

料はニスやラッカーで塗装としては弱い方です。いいものにはあまり強い塗装をしないで大切に使うんです。

欧州で家具の展示場を見に行ったときのことです。相当高級なテーブルがたくさん並べてありました。そのなかで一体どんなのが一番値段が高いかと思っ

てない白木なんです。これは買って帰って自分で塗装するんじゃないんです。家具用に作られたオイルがあつて、これでふきこんで大切に使うのです。本当の意味で最高級品は塗料をベタベタと塗るものじゃないんです。

考えなおしてみると、日本でもタンスは昔からキリ（桐）がよいとされていますね。そのタンズに塗料を塗ってしまったらだめになってしまいますね。東でも西でも木のよさを生かして使うのは白木のようにですね。

周郷 どんな油を使ったらよいのですか。

山本 本来は椿の実の油のようなものらしいですが、現在ではワックスなどを混合して作ったもののようにです。市販にはスプレーになっているものもあります。

周郷 白木のテーブルに接するのは、すし屋の板ね。きれいにしてあるね。

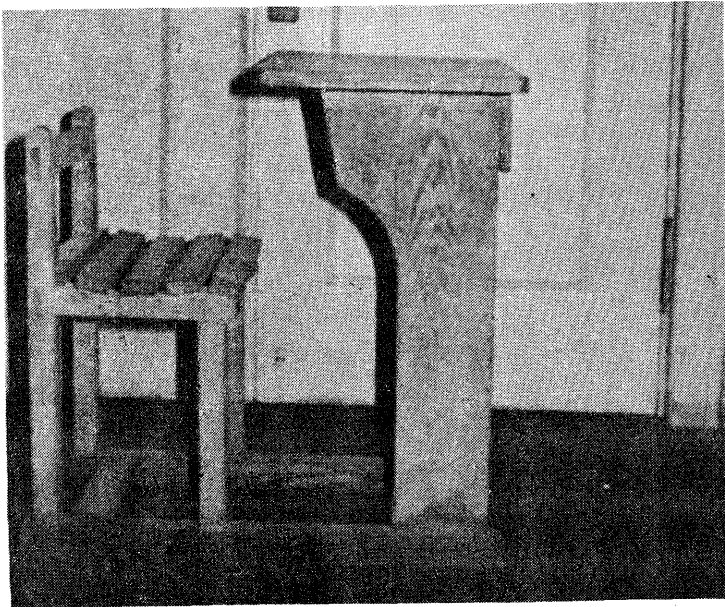
山本 あれは大変なんです。ヒノキですよ。あんな厚い板で、しかも節なんか見当りませんね。そしていつもきれいなのは、みがき砂でみがいているのです。よいものを保守するにはそれだけ手間がかかるわけです。

周郷 やはりよい物には手をかけただけのことがあるんですね。

山本 でもこう世の中が忙しくなると、そんなことをしておられませんね。最近では非常に強い塗装をするとか、メラミン化粧板を使うようになってきました。しょう油をこぼしても、あわててふかなくても浸み込みませんし、熱い土瓶を置いても跡がつかせませんから。

周郷 私は何のために忙しいのかっていう疑問を持っているんですけども。

山本 そのへんのことを心理学者の先生に教えていただきたいですね。

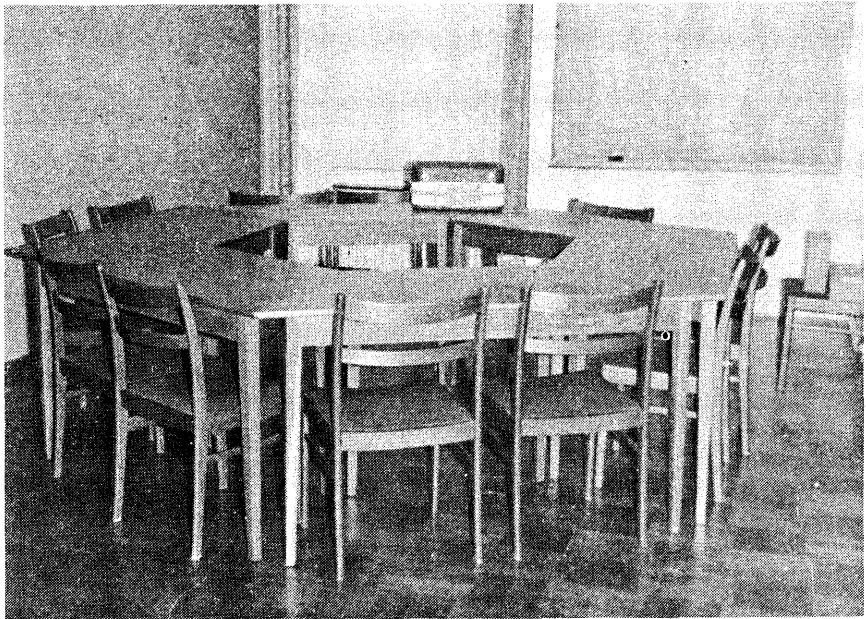


木製の学童机

最近学童用の机が売られています。電燈、時計、温度計それに時間表などいろいろつけてありますね。光に関係したことはあとでお話することにしまして、材質の問題を考えてください。鉄で作った上にメラミン化粧板を張ってありますね。これは手が冷えるのです。木の机だと、すぐ手の温度になじみますから冷えません。手足の冷えるのは精神的な疲労につながる事が最近の研究でわかってきたのです。

もっと大きな問題は水分（湿気）です。手から水が蒸発しています。この水分が手と机面との間にたまります。メラミン化粧板では、少し汗ばんだようになつてなめらかに手が動きません。夏など汗が出てくると、今度は潤滑油がはいったようなものです。すべり出す状態によつてすべり方が変わってしまいます。

木材のような材料では、いつも同じ



小集会用のテーブルといす(スエーデン)

床はナラ材

ようなすべり方をするのです。これは木材は水を吸ったり、出したりするので、汗ばんできたときは木が吸ってくれるし、いつも自動調節してくれると考えられますね。だけど木でも厚い塗装をすれば断熱だけの問題になるので、効果は少ないことになるでしょう。

津守 メラミン化粧板の勉強机の方が「下敷き」がいらぬが……。

山本 そのときは下敷きを使ってください。(笑い声) 体の方が大事ですから。あとでお話する光の反射の問題もありますから。

机、テーブルの類でも、食卓、勉強机、会議用など使用目的によってその機能を生かすように材質を選ぶのがよいと思います。

千葉大学の小原二郎先生が学童机について話をされた。先ほどのいろいろものがついた学童用のものについての統計です。小学校一年生では好みが一

〇〇パーセント、それが六年生になると五パーセント以下になってしまおうというのです。親の立場からすぐにあきるだろうとわかっていても子どもにねだられると買ってしまうのはよくないと思います。こんな場合どう指導したらよいか、児童心理の先生方に教えていただきたいのです。

小原先生は最後に「私だったら、子どもはすぐに大きくなるのだから、机よりもイスの方に金をかけますよ」といわれたのです。

イスについて

津守 児童科の児童室で使うのに、子どものイスを木にしようと思つて業者に聞いたら、『木のイスはもう作っていない』って言うんですよ。

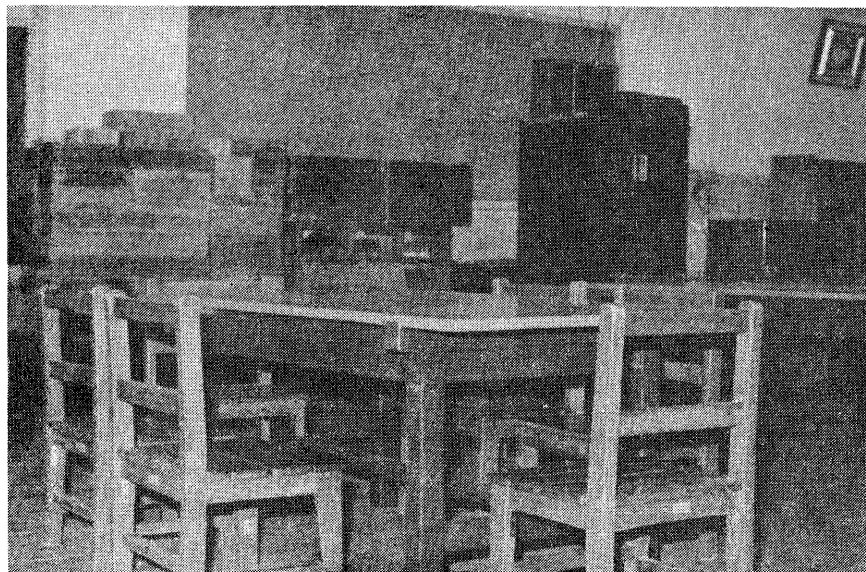
山本 そうでしょうね。同じものを大量生産しないと企業がなり立たなくなってきました。だから家具でも一般

向きのものではできても、幼稚園用となると特別注文ということになるでしょうね。

津守 木のイスとスチールのイスと比べて、子どもにどんな影響があるかということだけ取り上げた研究は、あまり見当たらないんですが、それにいつてはどうですか。

山本 やろうとしているのですが、研究方法がむずかしいのです。ドイツのある州では、『学童用の机やイスは木でなければならぬ』という規定があると聞いています。日本の役所では、データと理論から出発して、はっきりした結果を数字で説明しないと受け付けません。一般の人でもそうしないと納得しませんね。周郷先生がおっしゃった『私はこれが好きなんだ』というのが通用しない世の中ですものね。

周郷 なんにも好きじゃなくなつたもんね、人間は。



木製の幼稚園用机といす

山本 木のような天然材料は簡単に説明できません。いわゆる『いかにいられないよき』があります。非常に広い角度から検討して初めてわかってくるよきがあるのですから。

今ここにある古いイス、本物のかわが張ってありますね。前の方はすり切れて中からわらが見えてますな。(笑い声) このような生物が作った材料は均一性に乏しいので、強い部分、弱い部分があるのは欠点でしょう。

周郷 金物のイスはどうもきらいだな。

山本 使い方の問題だと思えます。建物のうちで、たとえば玄関をはいたすぐの場所でコンクリートや石の床の敷いてあるところで、ちよっと待つようなところに金属製で合成樹脂の布を張ったものを使うのはよいでしょう。部屋のかなで木の床板やジュータンを敷いたような場所で勉強や仕事をする

のにはやはり木のイスが喜ばれるのでしようね。

周郷 ヨーロッパの町を歩くと家具の店が多いですね。

山本 ヨーロッパ旅行の途中、スイスの町で小さな家具工場を見たときのことで、古い針葉樹の木材（正確にはスプルース、日本のトウヒと同種、楽器によく使われている木）で作ったイスが置いてあるんです。これは『おじいさんの時代からずっと使っていたイスだが、もう一つほしくなったので、同じものを作ってほしい』とたのまれたものだったのです。それで見本と全く同じに作ってから、時代がたったように見えるように、見本に似た傷をつけたり、樺でたたいたり、よごしたりして作り上げるのです。（笑い声）ずい分高いものになるようですが、周郷先生のお話のようにスイスの人は『好きだ』となったらここまでやっていると思

いました。

周郷 ヨーロッパでは、そういうことをやっているから、子どもは落ちついているんだろうと思う。古いものがないと子どもは落ちつかないんです。

山本 アメリカのマスプロ工場でクラシック・ファニチュア（古典形式家具）を作っています。ベルトコンベヤーでどんどん生産していますが、その仕上げのところでは傷をつけているんですよ。そのやり方が面白い。太い針金に鉄のナットなど、いろいろの金物を通した道具で、きれいに仕上がった家具の表面をたたきまくっているんです。それから塗装の途中で特別な塗装用スプレーで、インクがはねたようなシミを点々と吹きつけてるんですよ。（笑い声）それがよく売れるそうです。私は『古い』というより、『傷だらけ』と感じました。

周郷 日本人もわからなくなったん

じゃないですか。

山本 欧州人もその傾向がいくらか出てきているようですよ。年輩の人はそれがいやでたまらない。どうして若い人はアメリカナイズされるんだろうと嘆いていました。

床板について

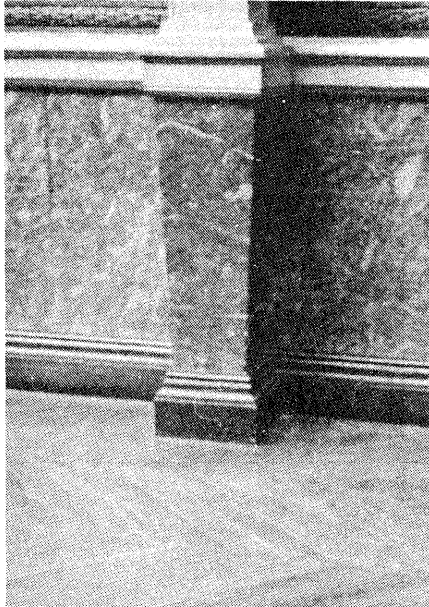
山本 この部屋の床は木製ですね。何の木かわかりますか。

津守 今、この建物の内装をきれいに変えようという計画があるんです。この床は油でふきこんで真黒になっているし、わかりません。

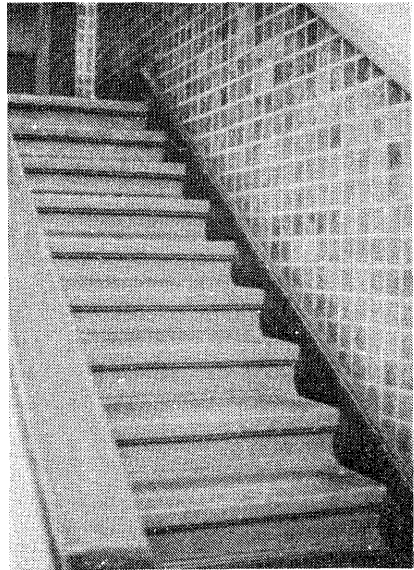
山本 ナラです。玄関の一部のものは全部ナラです。パリのベルサイユ宮殿もこの木を主体として床を張っています。

津守 そんなにいい木ですか。

山本 そうなんです。よく見てくださいよ。節が全然ないですよ。そ



ベルサイユ宮殿の床



お茶大本館内
ケヤキの階段

の上、木目が通っていて揃っていますね。最高級品です。それで階段にはケヤキが使っております。先ほど研究室を見せていただきましたが、一階、二階と廊下を歩いて見て、一カ所だけが来ていただけです。これは張り方がいねいだったことをあらわしています。黒くなっている、多少表面にでこぼこができてますから、表面をサンドペーパーで磨く機械でいねいに手入れするのがよいと思います。外材のきれいな材で張りかえたり、合成樹脂のタイルなんか張らないでくださいよ、ベルサイユ宮殿と同じなんですから。

(笑い声)

お茶大の本館正面玄関の外がミカゲ石で、ドアの中へはいったところが大理石ですね。

田口　そこまではわかる。(笑い声)

山本　そのつぎに講堂にいく手前にドアがもう一つあって、そのなかはア

ピトンと呼ばれる熱帯産の木です。階段の下の中央広間ですね。そこから廊下へ行くとき全部ナラ材です。多分中央の広間は人通りが多いのでいたんだから張かえたんでしょうが、惜しいですね。

私は六〇年安保騒動の時、名古屋大学農学部学科主任をやってたんです。過労でとうとう入院してしまいました。その病院の本館は立派な鉄筋コンクリートですが、私のはいった病室は大正十二年の大震災直後に建てたという、木造だったんです。いよいよ手術になると本館にうつりました。本館に行ったら同じ病棟にいた同病の先輩がおりますね。その人たちが早く木造に帰りたいというんですね。時期がちょうど十二月でしたから暖房がはいっているのどがからからに乾いてとてもたまりませんでした。とにかく病人は二十四時間、病室から出られませんから

たまりませんよ。(笑い声)

実験の開始

山本 退院してからこのことを名古屋大学の環境医学研究所の鈴木昭弘先生と同じ名大の工学部電気工学科の上田実先生にお話ししたところ『コンクリートの方が木より工合が悪いことは、

だれでもが経験していることであたりまえのことだ』というわけですね。足が冷えるというように。しかし実験的に数字であらわされた研究報告は今まで見たことがないので、調べてみれば、何かの手がかりが得られるだろうから、実験してみようということになりました。

実験のくわしい進め方や結果はこれ(雑誌「木材工業」二十二巻一、号昭和四十二年)に書いてありますから、ごらんください。

とにかく『足が冷える』かどうかを

調べるわけですから、コンクリートや木の物理的な性質を調べる実験ではだめなんです。コンクリート、ビニールタイルそれにナラの床板と材料をかえて、その上で机に向かってイスに腰かけた状態で足の皮膚温度がどのように変わるか、を測定するわけです。

私たちの知りたいのはごく自然の状態での結果ですから、測定室の温度なんかを人工的に冷したり、暖めたりすると、その季節によって外からはいつてきた人は測定のはじめから冷えていたりして、自然と違ってますね。だからたとえば冬の状態を調べたいときは冬に、といった工合に測らなければならぬので、測定は二年半ほどかかってやったんですよ。

足の皮膚温度は、足の甲、ふくらはぎとひざの三ヵ所に温度計をつけて測りました。年齢二十歳から二十三歳の女子三人が被験者となってくれました。

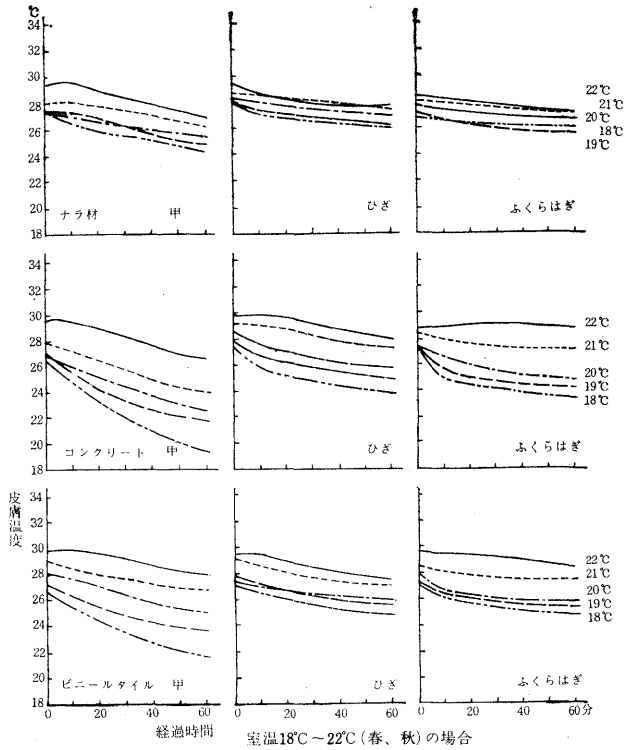


図1 床材料の違いによる足の温度変化

人間は自動調節の機能をもってますね。この機能はたいしたもので、どんな電子計算機を使っても人間ほどの調節はできないでしょう。だから床材料の差は小さいだろうと思ったんですが、案外大きく結果に出てきました。

田口 足は『はだし』ですか。

山本 いいえくつ(靴)をはいています。ですから畳は実験していません。

それから測定室は四畳半くらいの箱をインシュレーションボード(軟質セメント板・木質セメントをパルプ化しておしかためたもの)で作りました。この箱は底なしでコンクリート床の上に置きます。これでコンクリート床の実験ができるわけです。ビニルタイルにしたいときはコンクリートの上に敷くし、またナラの床板のときはそれを敷くという工合にやりました。

田口 足を組んだりしているとようすが変わるんじゃないですか。

山本　そうです。足を床から離さないようにすることだけ、たのんであります。あとは自由に本を読んだり、データーの整理をやってもらったり、普通の机の上での仕事をしている状態で測定しました。

周郷　結果を早く見たいね。やはりコンクリートは冷えますか。

山本　そうです。測定した結果は、まず春や秋（室温十八度から二十二度）の季節から説明しましょう。ここに九つの図面がありますね。一つずつが独立した図で、横軸が測定し始めてからの経過時間を分であらわしました。縦軸は皮膚温度です。室温が一度違ってても微妙に変わります。十八度から二十二度までの皮膚温度の変化のようすをカーブにしました。九つの図のうち、横に並べた三組は床材料が同じで、上からナラの床板、真ん中がコンクリート、一番下がビニールタイルの場合で

す。また縦に並べた三組は左から足の甲、真ん中がひぎ、右の三つがふくらはぎです。

田口　これは、どの床でも冷える傾向があるのかな。

山本　測定を始める前の状態から関係しますので、そうなるのです。測定の前には準備をしたり、ある程度動いていますから温まっているんですね。測定中は静かにしているので、温度が下がってきます。ここで気をつけて見ていただきたいのは、温度毎に書いたカーブが上下にバラツキているかどうかなのです。バラツキが少ない、線と線と開きが一番小さいのがナラ材であることがおわかりと思います。いいかえると体温と足の皮膚温度との差が、室温が変わってもあまり変化しない材料はナラ材であると言えるわけですね。この三つの材料の比較では、またコンクリートやビニールタイル

では、一時間の終りごろの皮膚温度が木材よりもずっと低くなっていることもおわかりでしょう。

この傾向は冬の場合も夏の場合も同じような結果が得られました。夏の測定でもう一つ面白い結果を申し上げますと、室温が三十度以上のときで、コンクリート床の場合には、足の皮膚温度（特に足の甲）は一たん下がって、一時間の終りのころにまた上がるようすが見られたのです。木材のときは春秋と同じように下がったままなんです。木は夏は涼しくて、冬は暖かいわけですね。

田口　私は、木っていうものは、生きていたもので、切られても生きていくような気がしてギョッとする時があるんです。そういうものはプラスチックなどと違って、ありがたいもの、尊いもの、という感を持ったことがなかったんですが、最近大学内で落ちてい

る古い木を拾って来ているうちによさがわかってきたんです。今のお話を聞いてみるとどうも木は切られても、生きていて人間と調子を合わせて調節してくれるみたいです。

山本 木を取扱っている私には今のお言葉はたいへん有難いんです。(笑い声)

『木は生きている』ということがありますね、このごろは理屈を言う人が多くてね、『それなら材木から芽や根を出させてみる』なんて言う人がいますから。(笑い声)

木の吸湿性について

山本 『生命』という意味でなく、別の意味で生きていると考えることでしよう。天然の生物が作った物質、動物の皮や絹糸、植物が作った木材や木綿なんかはどれも水分を吸う性質がありますね。そのほかに上の中のコロイ

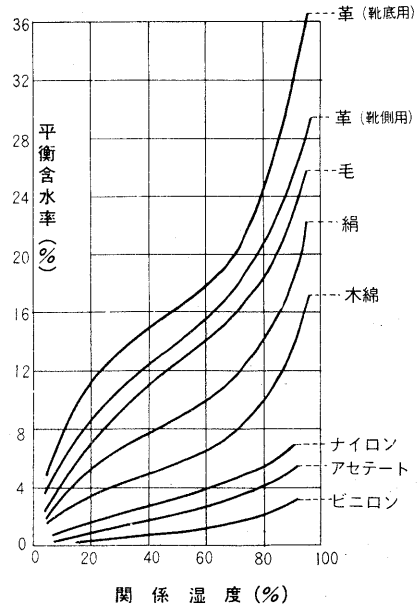
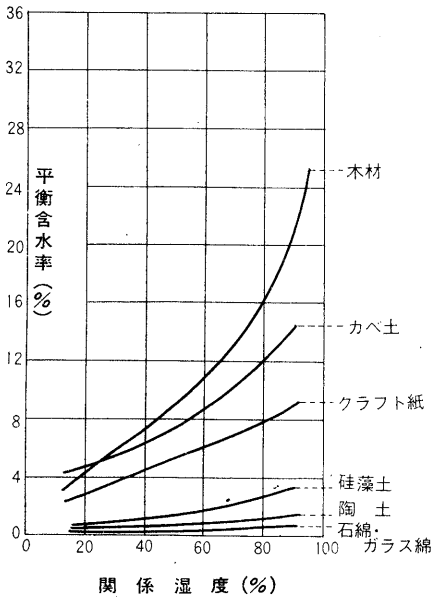


図2 20℃に於ける平衡含水率

ドも水を吸います。この水を吸う性質を吸湿性と言っていますが、これが生きていると考えるはどうでしょうか。よく調べるとガラスや合成セメントでも吸湿性があります。しかし皮や木と比べれば非常に少ないことがわかります。そのようなすは各種材料の平衡含水率の図を見てください。

この図の見方ですが、たとえば木材を関係湿度八〇%の空气中に長時間おきますと、木材の乾燥重量に対して十六%の重さの水を吸いこみ、ここでとまります。また関係湿度が二〇%の空气中に置くと四%までかわくわけです。この図でカーブが上の方にあるものが吸湿性がよいわけで、上の方はほとんど生物が作ってくれた材料ばかりです。田口先生がおっしゃった『生き物』は水をすったり、はいたりしているようにですね。

田口 こんな尊いものを子どもに、

気が付くべき時に気付かせるようにするには、そういうものに接する機会がないといけないでしょう。

山本 中世のヨーロッパの建築を研究しておられる名古屋大学建築学科の先生のお話では、木造の住宅が非常に多かったのだそうですよ。しかし城だとか教会などが有名なので、日本人たちは、あちらは石造りばかりだったように思っているが間違っているということでした。そしてヨーロッパではいろいろの石を使っているが、その中でビルディング・ストーン（建築用石の意）という名がついているのは石灰岩系のものだそうです。石材の中では一番吸湿性があるのだそうです。木材ほど大きくはありませんがね。

周郷 ヨーロッパの方は、なにか貼ってありますね、室内に。壁紙じゃないかって。

山本 どうも吸湿性のある材料で家

を作ると住み心地がいいようです。日本の家は木材、土壁、畳など吸湿性の材料ばかりできていますね。湿度の高い梅雨の時期には水分を吸って空気をかわかしてくるし、冬期に暖房を入れると空気がかわきますね。そのときは湿り気を与えてくれるから。そして時々刻々、毎日毎日、自動調節してくれます。だから長期間のことを考えると、建てるときにいい材料を使っておけば、エア・コンディショナー（空気調節装置）のような電気代のかかるものを使うより経済的にもいいとも言えます。

吸湿性の材料は水を吸うとふくれれます。かわくと縮みます。木材でもそうですから、冬期に暖房するとかわいて『すきま』があいて困ります。だから重ね合せたりいろいろ工夫するのですが、物を作るとき寸法が時によって変わるのは大変都合が悪いので欠点とい

うわけです。塗装をよくするとか、合成樹脂でかためる方法もずい分開発されて工業化されています。そして伸び縮みの少ない改良木材もできました。しかしこのような加工をしますと、吸湿性がなくなってしまうのです。生きていた材料を殺してしまうことになってしまいます。ですからここでも使用目的によってじょうずに使うことが大切ですね。

たとえばピアノは楽器ですから湿度によって寸法が変わって、音が狂ってしまうては困ります。ですから木製品としては最高の塗装がしてあります。勉強機の場合はどうでしょうか。机の方が大切で、寸法が変わらないように、そして傷がつかないようにするのが。それとも子どもの健康の方が大切なのかと言いたくなりますね。

照明・光の反射

周郷 朝鮮戦争のころに、ウィーンに行きましたら、随分品よく木を張ってありましたね。それから電燈は上からぶら下がっていることはまずないですね。皆横から出てるんですよ。その方が顔がきれいに見えますよ。

田口 電燈は上にあっても、それをつけないで置いてね。その部分だけつけて暗い中で本を読んでいるんですよ。誰もいないかと思うと石膏みたいにおばあさんがじっとしていたり……。そういう感じはヨーロッパにありますね。

周郷 それはヨーロッパでは、やっぱり人間を主にして考えているからですよ。日本は電燈の方が主なんだから。(笑い声)

山本 採光や照明のことを考えると、まず人間にはリズムがあることを考えておかなければなりませんね。私たちが野外で地図などを見ると、

どのくらいのリックスと違いますか。春秋で三、四万リックスはあるんですよ。真夏の直射日光の下では十萬リックスはあるでしょう。海では、漁船なんかで仕事をしている漁師さんは、こんな強い光で、紫外線も多いですね。でも目はつぶれません。これは人間の昼間のリズムになっているときだからでしょう。夜になってこんな強い光で仕事したら、目をいためるわけですね。

鈴村先生のお話ですが、教育ママの集りで『子どもを勉強させるには何リックスぐらいがいいのですか』と質問されるんです。(笑い声) 夕食がすんでから夜遅くまで勉強させるための照明が一般的だから、『明るさとしては普通の電気スタンドぐらいあればよい』といわれます。しかし問題はもつと別のことにあります。光の波長の問題です。光の質の問題です。

田口 紫外線だな。

山本　そうです。人間は昼のリズムのときには紫外線は健康線といわれるくらいに必要ですね。夜のリズムのときに強すぎると害になるということですね。鈴木先生の研究の結果では青い光から紫外線までの光は、夜のリズムによくないというのがあります。目玉が

疲れるんですね。蛍光灯は中に水銀蒸気かはいっていて、その中で放電させて光が出ます。その時出る光は単波長の光が何本か出てきます。それを蛍光物質で光を変換して全体として白色にしているんです。そして単波長の強い線は大分残っていて、特に四三五ミリミクロンの光は強く出ています。蛍光灯が古くなって、端の方に黒い斑点がついてきますね。そうなると全体の光の量は三分の二ぐらいに落ちてしまいます。でも水銀の線はそのままなんです。これがうまくないんですね。

津守　どうすればいいんですか。

山本　昔からある普通の白熱電燈を並用すればよいんです。部屋のまん中につるす方は蛍光灯でもよいですよ。ただし電気スタンドは傘付の白熱電球のスタンドにすればよいですね。白熱電球は夏には暑いですね。だけど紫外線は出ませんから。

もう一つ困ったことに最近はい白い紙でも、もっと白く見せるために大ていの紙には蛍光染料が入れてあるんです。これに紫外線が当たると、発光して目に悪いらしいんです。白熱電球なら蛍光物質は光らないんです。

勉強するときは目にはいる光は紙からくるように思いますね。本やノートのみわりの机からの反射光も目にはいってきます。だから机の表面材料が問題になります。木材の光の反射率は赤い光線はたくさん反射しますが、青から紫外部にかけてずっと少なくなっています。このごろ木目を印刷したもの

で、専門家でも見違うような立派なのがありますね。あれは化学染料などを使っている関係と思いますが、光の反射のようすは木材のようにならないので、特定の波長で吸収が起こったりしているので、工合が悪いときがあります。

また机の表面に電燈がうつつてギラギラするところができますね。そのところがピカッと輝きます。メラミン化粧板やガラスではむだな刺激が多くなります。木材はおだやかに光を散らしてしまいます。しかし木材でも塗装してピカピカになっていると、木材の素材よりは悪いことになりますね。古い木の机で昔の塗料が塗ってあるのは、表面が傷ついてガタガタですから強い反射がなくなつてる。勉強するには一番よいですね。そして小刀で傷をつけても『おかあちゃんにしかられる』こともないです。笑いな。(笑い声)鉛筆で書くとき穴があいて困るのなら下敷きを敷

けばいい。

ここまでお話すれば、壁面や天井などもやっぱり天然物を使った方がよさそうだということがわかっていただけでしょう。そして子ども部屋は明るい色にするのはよいと思いますが、あまりケバケバした色を使ったり、キツイ色の大きな装飾も誕生日なんかの行事の時ぐらいにするようにしてはいかがでしょうか。

赤間 部屋の色や飾りなんかも、気をつけなきゃいけませんね。

防音と吸音

田口 このごろ雑音や騒音が多くなって困りますね。

山本 建物の外から来る音をさえぎるのにはコンクリートや煉瓦のような重量のあるものを使わなければなりません。薄いベニヤ板や、厚さは相当にあるが軽い材料、たとえば合成樹脂

を発泡させたものなんかじゃ止まりません。この場合は上壁の方が良いですね。

こんどは部屋の中で出た音をとりのが吸音です。タイプライターなどをたくさん並べて仕事をするとかまじいですね。この音を天井や壁の材料で吸収させようというわけです。講堂や公会堂で音響効果をよくすることはずいぶん研究されていますね。こういう場合は残響がないように、また適当に残るように、というように考えられてるそうです。それから演壇から直接きた音と、壁や天井で反射してきた音とがぶつかり合って聞こえない場所ができないようにも設計します。そして測定してから修正するのだそうです。

さて材料との関係ですが、コンクリートだけで部屋を作ると高い音も低い音も九五%程度反射するので響きがたくさん残ります。厚い木は九〇%ぐら

い反射します。高い音も低い音も。

勉強したり仕事をしたりするには静かな方がいいですね。だけど静か過ぎるといけないらしいんですよ。鈴木先生の研究結果があります。ジェット飛行機の音みたいにひどい音はもちろん疲れます。また無音室のように静か過ぎるとまた疲れるんだそうです。

田口 昔から雨だれの音とか、松風の音なんかを楽しんだのは意味がありそうですね。

山本 そうらしいんです。適当に低い雑音が必要だということになりますね。しかしどのくらいの音がいいかということは、まだはつきりしていません。測定がむずかしいんですよ。

田口 音の質、高い音とか低い音とか。キイキイというのはきらいだな。

山本 『キイキイ』っていうのは高い音ですね。

田口 そうそう。

山本 普通の人が一番感度のよいのは四千サイクルぐらいで高い方です。

津守 幼稚園や教室はどうすればいいんですか。

山本 決定的な結論は出てないんだと思います。ですがちょっと面白い経験をお話ししましょう。ある会社の応接室に通されたとき、相当考えて作ってあって静かなよい部屋だと思いました。しばらくして社長さんや工場長さんが見えて挨拶してから、イスにすわって話をはじめたら、さっぱり聞こえないんですよ。両方からイスから乗出して話さなければならなかったんです。

赤間 静かだったら聞こえそうなのに。

山本 不思議なんです。その部屋は市販に出ている吸音板を使っているんですが、後でよく調べて見るとその板はちょうど人の話声に相当する音を主に吸収し、高い音は吸収しないんで

す。人の話声や靴の音や、普通にある雑音は低い方の音なんです。そして低い音は特に強い音や持続的な音でなければ案外邪魔にならないんです。

結局高い音を吸収させて低い音を残すことですね。応接間は静かですが話が通らなかつたわけが一応説明できます。この考えからいろいろな材料の吸音率を調べて見ました。そしたらうすっぱらなベニヤ板やうすいボード、それからガラスなどは低い音の方を吸うんです。コンクリートや厚い木材は先ほどお話しした通りだめですね。高い音をよく吸って、低い音をあまり吸わないものをさがしたんですがなかなか見つからない。やつとありました。ビロードのカーテンで一平方メートル当りの重さが五百グラム以上のものでした。イタリヤオペラでも思い浮かべさせるようなカーテンです。

足の冷え方の実験したときの箱はイ

ンシュレーション・ボードでしたが、これはビロードほどではありませんが、高い音の方をよく吸ってくれるようです。

吸音は板の性質と板の張り方(さん木が多いか少ないかなど)によって変わりますし、とてもむずかしいんです。結局音に関してはカーテンなど材料をじょうずに組み合わせる使う方がいいですね。それに本棚を壁側につくってぎっしり本をいれたら状況も変わってきますし、机やイスも入れますからね。教室ではさっきの応接間みたいに先生の話がきこえなくちゃしょうがないですもの。

普通の家庭ではどうでしょうか。居間、寝室、勉強部屋などは静かにしたいところですね。しかし外からの音を完全に遮断したら困りますね。ご主人さまが帰って来る足音が遠くから聞こえるのもよいですし、子どもがゲタで

走りまわったりして音もある程度聞こえる方がいいですね。

ゲタとスノコ

山本 すしやでは板前さんが高下駄をはいてますね。ハチマキをして、腹巻をつけて、高下駄で、いせいがいいです。なぜあんな高いのをはいてるかが問題なんです。おすしやさんに聞いて

てみるとゴム長グツなんかはいてると体によくないんですね。長い間の経験からきてるんですね。

コンクリートの床に水を打ったところは冷えているんです。温度計で測ってみました。机の上を基準にして、だんだん下へ温度計を下げていきますと簡単に測れますから皆さんもやってみてください。コンクリート床上一センチ



すしやで温度を測る

チメートルでは三度半ぐらいは冷えています。そして床上十センチメートルのところでは一・七五度ぐらいになっています。つまり机の上から床までの温度差の半分は床上十センチメートルまでにあることがわかったのです。そこから上は温度傾斜がゆるやかなんですよ。すしやの高下駄は十センチメートル以上ありますから、この冷えた領域から上に足があるわけです。長い間の経験からうまいことをやっていると思いますね。

田口 これは面白いね。あっちこちで測ってみたら住み心地の研究になるんじゃないか。

山本 住み心地ということは複雑ですから、この結果がすぐに住み心地の尺度になるとは思いませんが、この測定も一つの手がかりになるように思います。

赤間 冬はもっと冷えるんでしょう

ね。

山本 冬でもこの温度差はあまり変わらないうです。ただし夏の暑いときに冷房をしますね、普通のとときよりいく分温度差が大きくなるようです。

周郷 冷房病なんていう近代病もあるね。やっぱり人間は自然の動物なんだから。

山本 この原理からするとスノコはゲタを大きくしたものと考えてよいでしょう。けどスノコの板と板との間をつめてしまったら、スノコの上にあつた冷い領域ができてしまいます。間をあけておかなきゃいかん。喫茶店やバーなどで、カウンターのうち側にはスノコを敷いて働いている人が疲労しないようにして、お客さんのいる方は見かけをよくして、お客の回転率をよくしたらどうでしょう。(笑い声)でも店全体を居心地よくするのがほとんどでしょう。工場でもコンクリートの上に

スノコをよく敷いています。ドイツの機械工場でもやっぱり敷いてあります。

津守 住居や教室なんかを考えるときの、一つ一つの要因をうかがいますが、日本の気候から考えなくてはいいませんね。

山本 建築関係では『室内気候』とあって、室内の温度、湿度それに風速を取上げています。しかし周郷先生のお話のように人間はリズムをもった自然のものですから、恒温槽に入れているとはいけないと思います。ですから、住んでいる場所の気候から出発して考える必要があります。昔の人はえらいですね。従然草の中で吉田兼好は『家を作るには夏のこと考えて建てなさい』と書いています。それでね。日本のおもな都市で一年中に夏日が何日あるかを調べて見たんです。関東以西では夏日(一日の中で最高気温が二十五度を

越す日)が百五十日から二百日もあるんですよ。そして冬日(最低気温が零度以下になる日)は一ヵ月か二ヵ月以内なんです。従然草の通りです。だから北欧の窓の小さな建物を真似したって日本ではだめです。夏は南北に風が通るように窓でなくて戸が開くようにするのが最良ですね。でも東北や北海道では逆に冬日が半年間ぐらいあって、夏日が一ヵ月くらいのところもありますから、これこそ北欧式でも十分考えられますね。

赤間 コンクリートはだめですか。

山本 だめかと言われると困るんです。壁のコンクリートを白く塗っただけのアパートは今たくさんありますね。その中で住んでる人が全部死んでしまいうわけじゃないんだから。木造の家でも死ぬ人は死んでます。(笑い声)

最近、カドミウムや有機水銀、それにPCBなんかの公害や空気汚染をや

かましく言い出しましたね。これは長い間にだんだん体がおかしくなる、つまり半殺しはごめんだというわけです。私たちのグループの考えは、『人間の正常な生理機能を長く維持する』には生理環境をどうすればよいかと言う公害以前のことをやっているのです。

日本では土地が人口の割にせまいので、建物を高くして利用したいことはわかります。高い建物を作るには鉄材やコンクリートが都合がよいから、コンクリートを使わなければなりません。しかしその内装をどうしたらよいかを考えてほしいのです。ただ単に木材を張ればよいと言うわけにはいかないんです。コンクリートと木と接する部分にゴキブリが卵をうみつけたり、湿気がたまって腐ったり、カビが多くなったり、いろいろな問題が起こっているのですから。

この問題もその土地の気候に深い関

係があります。たとえばフランスの市街地で、町中の建物の物置は全部地下室または半地下室にあります。水がわくこともなく、いつもかわいているんです。日本で同じような構造にしたら、とても湿って使いものになりません。防水工法や排水設備をつけても湿るでしょう。

ですからコンクリートの団地で、台所や風呂場のようにいつも水を使うところでは材料の組合せ方がむずかしいでしょう。日本の昔からある間取は、台所が土間になっていて、風呂場やトイレが別棟に作ってあるのは長い経験によって作り出された尊いものです。改めて驚いているところです。しかし



半地下室の物置き（フランス）

生活行動からみて、不便なのは確かによくありません。これからの日本住宅は長い間に疲れが蓄積するようなことのない、ほんとうに生理環境のよい家で、しかも生活行動や生活機能からもよい家を完成してもらいたいものです。材料には非常にたくさん種類があります。石材、鉄やアルミニウムなどの金属材料、木材、皮やセンヤクなどの生物材料、合成樹脂などの人造材料など、どれでも手近かに使えます。しかし材料はそれぞれ特長をもっていますから、使用目的に合わせていくこと、それに長い間に変化（腐ったり、もろくなったり）することを考えにいれなければなりません。また長い間には突然の出来事（火災、地震、台風その他不測の事態）のことも注意して、工夫して使わなければなりません。新しい材料もどんどん開発されてきますしね。

木材と森林について

田口　こないだ家の近くの材木屋さん
に聞いたら、近所は家がどんどん建
つてきてるけれども、一軒の家の材木
の七〇%ほどが外材だそうですね。日
本の本で作ろうとしたら、とんでもな
いぜいたくで、とても許されないこと
だそうですね。日本の木がそんなに減
っちゃったのは、切れるところは皆き
り尽してしまったのですか。

山本　昭和四十六年ごろの統計では
たしか日本全体の使用量の五五―六〇
%ぐらいが輸入なんです。日本のスギ
やヒノキは天然生のは少なくて人工造
林といって植えたものがほとんどです。
木材は切って、山から出してくるのに
人件費がすごくかかるとです。そして
市場で値段がきまりますが、これが製
造価格でなくて買手が値段をきめる仕
組なんです。

周郷　僕の友人で、山林を持っていて、スギを売ってお金にしたのだが、外材の方が安いもんだから買手がなくなっちゃったんです。

山本　そうですね。このところ数年間スギの値段が下がってしまいましたね。

輸入材は外国の港からの距離、搬出距離が採算にあう森林から天然生の木を切ってるんです。外材は節が少なくて太くて値段が安い。太いうえに大量生産の工程にうまく乗るので、市場価格も安いんです。

津守　外国でも、そういう木はだんだんなくなるんですか。

山本　フィリピンのラワンは戦前は安かったが、このごろは高くなりました。海岸近くの森林には少なくなつて奥地から出すためです。針葉樹の材は今のところシベリヤ、カナダやアメリカの海に近い森林にありますから当分

は続くでしょうが、いずれは問題が起こるといわれています。

日本では傾斜の急な山に森林がありますね。そして山は外国に比べて小さな谷が多いので、一まとめの立木を切っても出ずのに手間がかかるのです。

人工的に植えた森林では、間伐をやります。立派な大きい木を造るためにじやまになった木を切ることでですが、間伐林は細いものが多いので切り出しても損になるので出せません。質としては使えるものですがね。それでも山林に関係のある人たちは一生懸命に植えています。

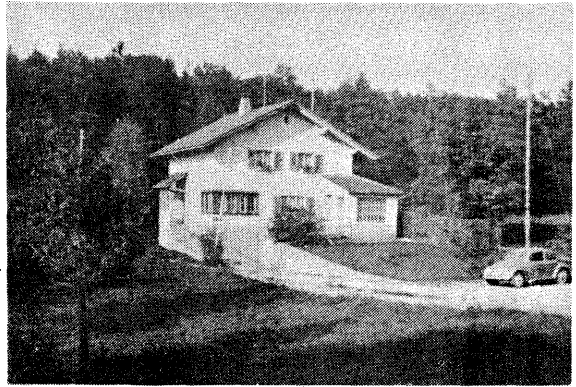
『農業は土作りだ』ということをお聞きになったことと思いますが、森林でも同じことです。昔の農業は採草地や森林から草や落葉を取ってきて畝に入れてました。山で木を育てるには同じことで、そのような有機物がほしいのです。植えては切り、また植えては

切りを繰返していると土地がやせてしまします。よくできる土はわずか三十センチメートルぐらいしかないでしょう。場所によって深い所も浅い所もあります、これが少なくなってくる問題が起こります。森林はこの土を基にして上には木や草が繁り、上の中には無数の昆虫やバクテリアなど生物がたくさん住んでいます。森の中には動物が住んでいて、空には鳥が飛ぶといった工合に大きな生物社会が形成されていてバランスが保たれているんですね。

生態学者である横浜国立大学の宮脇昭先生はこの研究をやっておられます。先生の話では、メソポタミア、エジプト、ギリシヤ文明もローマ帝国も現在見られるような砂漠中に忽然と現われたものではない。日本の南の地方と同じような立派な森があったのだ。アラブ、ラテン系の民族が長い間かかって

文明を発達させたけれど、郷土の森を食いつぶしたときに滅んでしまったのだということ。そして文明の中心が地中海から中部ヨーロッパへ移っていくと同時に文明もゲルマン、スラブ系の民族へと移ったのです。

肉食人種のこれらの人たちも、一度は林内放牧、森林乱伐や火入れ（森林を焼きはらって畑を作ることをやってヨーロッパ大陸を荒らして、乾燥に耐える草しか生えない草原になりました。このことは十六、十八世紀のレンブラントや大勢の画家が描いた風景画でわかるといわれています。今から二百年ほど前のプロイセン時代に、このままでは国土が荒廃して民族の発展は望めないということで、強力な政治力で林内放牧は禁止、火入れも乱伐も禁止されました。それ以後二百年かかってやっと現在の森が復元されたのです。



森の傾斜地にたてた住宅
(スイス)



森と住宅の調和した
ストックホルム郊外

ヨーロッパでは森を破壊して、文明の担い手が移り変わってきたのに比べると、日本民族は少くとも百年前まではとてもうまく郷土の緑とともに力強くやってきたのです。水ぎわや尾根筋など弱い自然は破壊しないで残してきました。また町や村の中心やまわりには神社やお寺をつくって、社寺林を郷土の木によって復元してきたのです。

今でも旧家は屋敷の林の立派さで測られるように現代の生態学の知識に勝る見事な『自然の秩序』をたもたせて、緑の森と共存してきたのです。

最近の産業の発展や自然の開発のやり方はや々と残っている緑をブルドーザーでつぶして、このまま進めば何も住めない人工砂漠になってしまいます。『今、目を開かないとおしまいですよ、

他の民族がさきに実験すみなんだよ』

と宮脇先生は力説され、警告されてい
るのです。

先ほどお話したように、木材は足ら
ないんですが、森から取出すのには限
度があることがわかっていただけだ
と思います。木を育てることは自然がや
つてくれるので人はこれをちよつと助
けるだけなのです。決して人造品では
ないのですから、一かけらの木片でも
もう一度何かに使えないか考えてから
捨てるくらいに大切にしてください。

津守 話はつきませんが、時間も遅
くなりましたので、きょうはこのへん
でおしまいにしましょう。貴重なお話
をたくさんうかがいました。どうもあ
りがとうございました。

徒然草 第五十五段

家の作りやうは、夏をむねとすべし。

わるき住居は堪へがたきことなり。

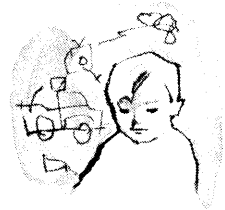
深き水は涼しげなし。浅くて流れたる、遥かに涼し。こまか
なる物を見るに、遣戸は藪のまよりもあかし。天井の高きは、
冬寒く、燈暗し。造作は、用なき所をつくりたる、見るも面白
く、萬の用にも立ちてよしとぞ、人の定めあひ侍りし。

遣戸 やり戸 引戸（現在の雨戸）

藪 しとみ 上下二枚からなり、上一枚は金物で釣り

上げて採光する。

自然のあそび



加 奥 愛 子

縁側の下で、二歳の誕生日を迎えようとする孫が、パパの買ってきた砂で、夢中に素足になって遊んでいる。原始の時代から土に親しんだ人間の姿そのままに、再現しているようなようです。また水遊びをしている時も、他の玩具以上に、興味をもち長く遊んでいる。園児が「鉄わん」といって、つくっていた泥んこの玉が、手でさわわり、砂をかけ、つばをかけ、ねりにねり、さわりにさわって、柔らかな土が、かたい鉄のようになり、落としても、われない玉に出来上がっている。その時の生き生きとした眼、手の動き、真剣な顔、が思い出されてくる。

子どもは、高価な玩具より、自然の遊びが大好きのものである。水、空気、太陽、自然の恩恵により人間は、生存を保ち、人間らしく人格形成をなしていく。現代の都会の子どもたちは、自然と接する機会が少なくなり、遊びも、昔のように自然のも

ので玩具をつくり、遊びを考える事が少なくなってきた。

最も発育がめざましく、肉体的にも、精神的にも人間の基礎の出来上がる大切な時期に、室内遊びが多く、塾やお稽古事で忙しく、昭和四十四年に調査した時も、一二〇人の中、オルガン二十九人、書き方十八人、ピアノ十二人、絵十一人、バレエ一人、何もしないのが四十九人で、半数以上の園児が何か習っている。テレビを見る時間が、二時間四十六人、三時間三十一人、一時間二十人、一・五時間十六人、四時間五人、〇・五時間二人、で、余暇をテレビで遊んでしまう現状である。

公園や動物園へいくかの質問に、行く一五十七人、時々三十六人、行かない一十八人、無記入一十九人で、遊び場がないので、公園を利用しているのが半数近くあり、半数は、その利用も少なく、全然行かない子どももいる。太陽から離れて、もや

しっ子が増えていく。体格は、栄養が足りてよくなっているわりに、体力が劣り、骨折も増えている。去年の夏ヨーロッパを回った時、ライン川の舟の中で、はだかんぼの子どもがいてお行儀が悪いなと思ったが、案内人の話では日光浴を今の季節に充分しておかないと、早く冬が来るとの事だった。またオーストリーの山の上でも、テールを庭に出して、家族が食事をしている風景、スイスのチューリッヒ湖畔で、赤ちゃんを乳母車に寝かせて、家族で散歩をしているなど、自然に接し、日光に浴する事を、心してしているように思われた。

フレールは、人間は単に自然の形と姿との多様性を認識するだけでなく、自然の統一、自然の内的活動性ないし自然の影響をもまた理解せざるを得ないようにできている。そしてそれゆえに、彼自身がまた彼の発達との陶冶との過程において、自然の過程に従うのである」といった。だから彼は、彼の遊戯においてさえ自然の創造過程を模倣する。

自然との接触はすべて人間を高尚にし、力強くし、純化するものである。だからこのような自然は、あたかも気高い偉人のように、人の心をひきつける。授業の許す場合には、いつでも自然における生活であり、自然と共にする生活であった。近くの高い山の頂から、私は、鮮かな、そして静かに沈み行く太陽や、はるか彼方から、ばら色の光に輝く残雪や、水河やアル

プスの山脈を眺めて楽しんだ。実際に夕方の散歩は、晴朗な日の落ちるころは、私に欠くことのできない必要なものだった。照らされている広い岡の上を、あるいは、水晶のように清らかな、そして鏡のようになめらかな湖水の静かな岸辺に沿って、あるいは高い林樹のうっそうとした葉間の道を逍遙する時、私の魂と私の心情とは純粹な神の実在と、人間の高き価値との理念に充ちて、私は幸いにも人間を神の愛児と考えることができたと”といって人間教育に自然の教育の必要性をいっている。

都会では遊び場がないということ、日々に激化する交通の危険の中に、生命の安全を第一に考え、制約があり、のびのびと戸外遊びをする事ができない。友だちとの交流も少なく遊び方を知らないといわれている。祖父母、父母、青年、と受けつがれた幼いころの遊びが、急になくなりつつある。日本のよきもの、わらべ歌と共に遊んだ伝統のものは残して伝えていきたい。

現代の遊びを調査した学生のありのままの感想をあげると、次のようなものである。

●今の子どもは遊び方を知らない。高価なものを親が与える。
●母や祖母が、そつと私のために愛情のこもったものを作ってくれた。私の子どもにもしてやりたい。

●現代の玩具が増えたといつて、幸せといい切れない。

● 昔の玩具は、夢があり、創造性にみちていた。自分で考え出す遊びが、いまは少ない。

● 手づくりのものは、心の成長にすばらしい影響を与えると思う。

● 私の時代は、テレビがなくラジオで、絵本を読んでもらった。

● 祖母の時は、男の子と遊ぶと叱られた。祖母は貧しくて玩具で遊ぶ、子守りをしたり、内職を手伝ったといっている。

● 昔より本物そっくりの精巧なものが多いが、玩具に魂がない。

● お金さえ出せば、手に入る時代。テレビが出るころより戸外遊びが少ない。

● 交通事故、誘拐等の理由から遊び場が少なく、かわいそう。

● 今の子どもは、すぐにあきたり、疲れたりする。私の小さい時は、自然を利用して健康的に遊んだ。

● テレビの人気ものの放映が終了すると、玩具の方も姿をけすといわれている。

● 親は、よしあしより、高価なみかけのよいものを与える。

● 現代の子どもは、物を大切にせず、素朴さを忘れている。玩具の与えすぎの悲劇である。

● 私が初めてゴムまりを買ってもらったうれしさは、忘れら

れない。

● 祖母の時代の方が創造性に富んでいる。子どもが創造する玩具がほしい。

● 自然を利用して、健康的に遊んだ昔の人と、スモッグの町に住む現代っ子の考え方の相違点も環境からきていると思う。

● 手づくりの玩具から既製のものになり、さびしい。私たちは、めぐまれていた。今の子は勉強で、祖母の時は、仕事で遊べない。

● 昔も今も同じ子どもだから、表で走り回りたいであろうと思ふ。

● 国民全体が裕福になってきたことも一つの原因だが、だんだん外で遊ぶことが制限されてきた。

● 現代の発展してきた中間に、私等はいたと思われる。母の時代と同様、カブト虫、ホタル等、デパートで売っていないで、とりに行った。

● 今の玩具は、親切であるようで、不親切、こわれると使えない。

● 物質不足で、簡単なものが多かったが、のびのびと広い場所ですり回り、ころび回って遊んだ。玩具が増えたが、遊びが、こじんまりとしてきた。

● 学校や幼稚園が補うことになり、教師になった時の責任は

あそびの種類と年齢との関係

(ビューラー)(%)

| 年 齢 | 感覚あそび | 模倣あそび | 受容あそび | 構成あそび |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 0 : 0 | 110 | — | — | — |
| 1 : 0 | 82 | 6 | 12 | — |
| 1 : 6 | 59 | 26 | 15 | — |
| 2 : 0 | 27 | 41 | 14 | 18 |
| 2 : 6 | 6 | 50 | 22 | 22 |
| 3 : 0 | 10 | 55 | 18 | 17 |
| 3 : 6 | 3 | 62 | 3 | 32 |
| 4 : 0 | 3 | 67 | 6 | 24 |
| 4 : 6 | 12 | 25 | 26 | 37 |
| 5 : 0 | 11 | 14 | 18 | 57 |
| 5 : 6 | 16 | 13 | 7 | 64 |

重大である。

学生たちは、実際に経験した事、見た事、聞いた事を通して、現代の子どもの状態を知り、今後の保育は、どうあらねばならないかを把握しようである。年々進んでいく都市化現象は、子どものまわりから、自然を奪ってしまつて自然に親しむことも少なくなり、生活経験を貧弱にしている。幼児自身が体を通して経験することが少なくなり、創造はすでに知られている事実の新たな結合によるといわれ、無からは、創造は生まれない。また幼児の個性は、遊びによって発達していく。子どもが成長しつつある能力を最大限に実現する遊びは、知識、技能、社会性、情緒性についても、これを総合した姿で、形成していく働きをもっている。遊びの種類と年齢との関係を上にしるす。

小さい時から木にのぼったり、走ったり、とんだりして慣れている子はしくじることが少なく、あまり外遊びのできなかった子どもが問題を起すといわれる。好奇心をおさえると、創造力も、物事に対する意欲も、もたない子どもになり、欲求が満たされずに反抗的になる。性格的にいじけてのびのびした明るさがなくなってしまう。木のぼりは、力もいるが、同時に勇氣、決断力、注意力がある。自分の力をためし、自信をつけていく。ボール遊びで、目と手の協応性、石けりや平衝感覚、なわとび敏捷性、瞬発力、等体を動かすことによって、諸機能の

発達を促す。テレビにばかり夢中になり、室内遊びで幼年時代をすごすと子ども同志の社会性もなくなり、自分勝手な考え方をして、人の気持ちのわからない片よった人間になる恐れがある。友だちと仲良くしたり、けんかをしたりしているいろいろな個性の仲間ともまれて、情緒的、道徳的、能力も養われていく。心してよい遊び場環境に入れてやらねばならない。

最近のニュースで、空気、水の汚染が、このまますすむと人類の生存もむずかしくなってくる事を報じている。私は奈良県に住んでいるが、奈良県の緑の多い所でも、学校、工場はもちろんの事、各戸が一木一戸に植える運動が始まってきた。私たちは、毎日二万リットルの空気を吸って生きているといわれ、その空気の中の酸素は、樹木が与えてくれている。あるドイツ人は、自然に生長した五〇年以上のブナの樹一本で、十二人の人々の呼吸に必要な酸素が供給されているといっている。密閉したガラスびんに、ネズミを入れるとすぐ窒息しそうになるが、葉のついたハッカの枝を入れてやると生きかえることに気がついた（一七七一年）ジョセフプリーストリーの発見より光合成の研究がなされているとの事、光合成とは、光のエネルギーを使って、水と空気からとった原子を結合させ栄養価の高い種類の分子を作る。その時副産物として、遊離酸素が放出され、人々の生命をささえる大気をきれいしてくれるのである。

また陸上植物の二倍以上の光合成が、海洋で行なわれている。海洋で光合成にあずかっているのは、おもに藻類である。生物が陸上に現われるはるか以前から、有毒な気体だった地球の大気を呼吸できる空気に変える働きをつづけ、それに二十五億年ぐらいかかったであろうといわれている。またジャック・ピカール教授は、地球上の酸素の大部分は、海面近くに住む原始的な植物、プランクトンが生産している。海面に油の膜ができる植物プランクトンが絶滅して、海中の生物系が破壊されてしまう。科学の進歩と文化の発達は、めざましく、夢に描いた月の世界へも行ける時代に到達し、テレビで世界の状況が手にとるようにわかる便利な生活、その恩恵も大きいだが、反面それにもまして、人類の生存自体が、危くなってきた現代、何としても、幼子の生命、人間の尊重を、今ほど真剣に考えねばならない時代はない。自然にかえれと叫んだ、フレールベルの声に耳を傾け、教育の原点に帰らねばならないと思う。

（大阪キリスト教大学）

参考書

「フレールベル自伝」

長田新訳著 岩波書店

「あそびの心理と指導」

小口忠吉著 福村出版

リーダーズ・ダイジェスト

7月号 一九七二年版

私の保育



新井 芳

いつのことだったか、友だちと話をしていた「あなたの一番大切にしていることはどんなこと？」と聞かれたことがあります。「やっぱり『思いやり』ということじゃないかしら」と答えて、私の保育にも通っていることではないかしらと最近思うことがあります。

お弁当のあと、お部屋を掃除している時のことです。ある子どもが庭からもどってきて、部屋をのぞいて私を見ると、「先生、大変だねえ」と言うと、「ほくも手伝っていい？」とほうきを持ってきました。「ええ、いいわ。じゃお願いしようかしら」子どものことです。それからまだうまくいきませんが、それでも一生懸命にごみを集めています。そのうちにそれに気づいた子どもたちが一人、二人と集まり、最後のころには、ほうきやちりとりとりっこになってしまいました。今では、私

が掃除を始めるときまって何人かの子どもたちが手伝ってくれるようになりました。私は大変助かると同時に、どんな小さな子どもにも他の人のことを思う心が芽ばえていることをうれしく思い、美しく感じられました。そして、そろそろ当番制にしないでほしいと始めています。

子どもは非常に自己中心的です。自分の意見が通らないとけんかになることもあり、涙をこぼしたりすることもしばしばあることです。ところが、考えてみますと、私たちおとなの世界はあまりにも私利私欲の面が多いように思われます。核家族がふえてきていること一つみてもそう言えるのではないのでしょうか。もし自分が年寄りになった時、一人ぼっちになってしまったりどんなにさびしいものかと思えます。やはり自分の育てた子どもや孫と一緒に笑うことの多い日々であってほしいと思

ます。それに何十年も暮らしてきたお年寄です、生活の知恵だとか、見習うべき点は若い私どもにはたくさんあるのではないかと思われます。このごろ保育していてふと感じた『思いやり』ということです。

「また、私のクラスは「先生」「先生」で大変です。先生が大好きで先生の言うことは絶対なんです。これはお母さまからのお話を聞いてわかったことなのですが、私もこれにはびっくりしたくらいでした。今、私のクラスでは鉄棒がはやっているのですが、「先生！ 見て見てホラ」と言って一人一人が見てほしくてその声が絶えません。見ると、一人一人が自分で考え出したやり方を競いあっています。それをやるたびに「すごいわねえ」「あら、おもしろいのねえ」「へえ、かわったの考えたのね」と一言一言、言うことに忙しい私です。

先生が大きな存在になっていることは家に帰ってからも続くようです。家へ帰ったら手洗い、うがいをしましょうと約束しあるのですが、よくやっているようです。それからちよつとした手あそびなど、私そっくりりに表情をまねてやってみせるそうです。まあこれは先生絶対というよりは、何よりも園生活が楽しいものだというのでしょうか。

次に私のクラスは遊びが非常に活発なクラスだということ

す。ある日のこと、もうそろそろ皆が園の生活に慣れ、遊べない子どももいなくなったので、今日こそはみんなと一緒に遊べるわと思ひ、男児何人がイスを並べて何やらやっているのを見て「先生も仲間に入れて」というと「いいよ、いいよ」と入れてくれました。「これはおもしろそうね」「バスだよ」「どこ行き？」「どこへ行きたい？」「森！」「じゃあ森をつくりましょうよ」そして茶色の色画用紙で筒をつくり、緑色の色画用紙でちぎって筒にさし込み、でき上がりです。すると今度は森に住んでいる小人だとかへびだとか、それじゃあ前につくったトランシーバーも持っていこうとか、望遠鏡もつくろう……そしてやっと森ができました。

今度はバスに食料を積み込みはじめました。おもちゃというおもちゃの箱を運び込み、うしろに積み込みます。そのうちに、「私も入れて」「私も入れて」とその日はとうとうクラス全員のある子どもがいて、団長さんになり、命令したりして指揮をとり、とても愉快な一日になりました。その遊びはともおもしろかったらしく、子どもたちの間で人気があり、その後、何日か続いたようでしたけれども、いつもこうした明るい日ばかりではありません。誰ちゃんと誰ちゃんがけんかした、けがし

た、気持ちが悪い、帰りたくなっちゃったとか、年少の一学期ですのでまだまだ不安定な面があります。子どもの活動は、それぞれ特徴をもって流れています。どの遊びも大切にしなければならぬと思いつながら、そうした事故におわれてしまうこともしばしばあります。

ある女の子で、入園当初、お家へ帰りたいたいと言って泣く子がいました。どうしようかと思つていろいろ考えてみましたが、朝、机をふいたりしているとそばにくっついてくるので、お手伝いをしてもらうことにしました。そのことがとても気に入つたらしく、お手伝いをするに安定した子もいました。

また、入園式の次の日から二日間ワーワー泣いていた子は、園のようすがわかつたのか、次の日からはケロリとしてあばれまわり始めました。「今度は何をやるの?」「次は何をやるの?」と不安そうにたずねる子どもには、次はこうするのよ、とあらかじめ教えてあげると安心した気持ちになる子もいました。そしてクラスの皆がはじめのうちは家にあるのと同じような、ままと、絵本、ブロックなどで遊んでいましたが、私はなるべく「物」で遊んでばかりいないで友だちどうし、肌と肌をふれあって遊ぶように心がけました。石ころ一つ、うた一つでも大勢が遊べるようになってほしいと願っていましたから……。

そのうち、誰ちゃんの鬼とか、誰ちゃんのおとなりよとか遊びの中で名前を覚えるようにしていますと、気の合った友だちが一組、二組とできはじめ、幼稚園生活に根がはっていったようです。

そろそろ園生活にも慣れてきたころ、私はそれぞれの子どもに『自律』の精神を身につけたいと思い、ある日、音楽リズムの時間に、「おたまじゃくしの散歩」と題して、昼寝をする時に、洋服をぬいでみることにしました。さあ大変です。いすの下に靴をしまい、一枚一枚ぬいだ洋服はきちんとたたんで重ねます。もう、へやじゅうが大きすぎです。けれども、二歳でもうぬいだり着たりができるのですからできないことはないやうらせてみました。皆、真剣な顔つきです。中にはやはりできない子どももがいて、友だちに手伝ってもらいながらの子どもも何人かいました。自分のことが一人でできるといふことはとても自信がつくようです。できた子どもは満足感で意気揚々としています。それから家では自分でぬいだり着たりすることを約束し、お母さま方にも協力していただきました。子どもたちにも自信をもった生活をさせていきたいと願っています。

次に大切に行っていることは『体力』です。地方の恵まれた環境の子どもたちに比べ、都会の子どもはどうしても体力があり

ません。気管支炎、ぜんそく、細い腕、足を何とかして直したいものと、天気の良い日には、おおいに庭で遊ぶようにしています。かけっこ、鉄棒、ハンカチとり(ジャンプ)、鬼ごっこ、ボール遊び、なわとび、ゴム段、あらゆる方法を使って体をたくさん動かして遊ぶよう心がけています。それが子どもにも楽しいらしく、一ときもじっとしてられないようです。暑くなって汗をかくようになって、少し涼しい所で休むように言っても、ちよこつと休んで、すぐまた、飛び出していくしまつです。おとなになってから体力をつけようとしてもなかなか大変なことです。やはり若いころ、鍛えた体は、後々までも宝となるものと思います。

次に大切にしていることは『童話』です。家庭訪問の時に必ずお母さまにお話することの一つです。幼児の心にびったりとしみ込んでいくお話は、もうおとなになってからでは養えない心です。やさしい気持ち、親切な気持ち、いたわりの気持ち、その他たくさん心が童話には折り込まれています。お家ではお昼寝や夜寝る前にお母様の生の声でお話すると、疲れがとれると同時に、快く眠りに入れることから、ぜひにとすすめています。園ではお帰りの時、ちよこつと時間をつくって聞かせてあげています。「大きなかぶ」のお話などは大好きで「ウント

コショ、ドッコイショ！」と皆で声を合わせてかけ声をかけます。こうして童話からいろいろ夢をふくらませて遊びにも発展させていく要素にしているようです。幼児の生活は現実ばかりでは生活していけない夢の想像の中で生きていることが多いようです。

最後に、私はうたが大好きです。子どもにもいいうたがあると、さっそく教えています。うたは、うれしい時も悲しい時も、人の心をなぐさめてくれたり、はげましてくれたり、ふしぎな力をもったものだと感じています。台所などで口ずさみながら働くお母さまのうたや、木やりうたのように仕事と共にうたうた。子どもの生活でもそうです。鼻うたまじりでトントン積み木を組み立てたり、でき上がった積み木のお城で肩を組んでうたっているグループ、そうかと思うと悲しいピアノのメロディーを耳にして「何だかさびしい曲だね」とつぶやく子ども、うた一つで遊べるもの、いろいろとあげてみますと、私たちの生活をどんなに潤いのあるものにしてくれることでしょうか。

(十文字幼稚園)

幼児教育とは何か

幼稚園の意義を考える



関 口 は つ え

はじめに

最近子どもの発達加速現象が注目され、小学校の教育内容が一段とむずかしく改訂され、中教審答申にみられるように幼児教育制度の改革が云々されている。しかし一方、昭和四十四年の保育学会による幼児の精神発達の研究において、十五年前の幼児に比べて、社会性においてははかかなり発達が遅れていること、また知的な発達においてすらも、「自分の年をいう」「両手の指の数を覚えている」「住所をいう」^(注1)など、生活に即して育つとみられる領域での遅れが指摘され、また、近ごろの家庭におけるしつけの乱れが目立ち、親のあり方についての多くの疑問が出されている。このような時に当たって、幼稚園における読み書きの指導をどうするかというような議論の前に、社会全体が

幼児に対する対し方をもっと真剣に考えなければならぬと痛感する。

現代の能力中心主義から、幼児の教育を発達の促進や能力の開発に重点をおく傾向が強いように思われるが、教育は個人の開発と同時に、社会の発展に即するような型づけも行なわれるべきものである。それにもかかわらず、社会化の基盤となるべき家庭教育の方針がゆらぎ、しつけのわくがゆるやかになることに比例して、集団保育の場におけるしつけや学習への期待が大きくなっているのが実情である。

たしかに、変化がはげしく、五十年後の世界を予測することの困難なこの世相の中で、幼い子どもを教育することはたやすいことではない。今の幼児がおとなになるころのために、何をしてやるのが一番よいのか、根気強く教え、大切に育てたも

のが本場に役立つようになるのか、信ずることがむずかしい。悪化する生活環境の中で、個人ではどうすることもできない無力感にさえおそわれるのである。そこから親は子どもに未来を託して、忍耐強く子どもをはぐくむ氣力を失い、自己自身の満足や直接的な効果の現われることに氣をとられやすくなり、一方、母親自身も社会的な存在として、社会的な役割をになうことが多くなることから、家族の關係が情緒的に密度の高いものから、合理的ではあるけれども機械的な、平面的な結合に変わってくるという傾向もみられる。

以上のような問題と共に、かたよった児童中心主義の考えが、子どもの知的な能力、意欲や自発性だけを重要視して、人格的、情緒的な陶冶を無視する傾向を生み、集団保育の場（幼稚園、保育所）の普及にともなうて、幼児の教育を社会の責任に転嫁しようとする風潮が強い。そのような中であつて、今必要なことは、幼児期の意義、発達の特徴、生活状況をよくとらえて、子どものために留意しなければならないこと、子どもに教え、方向づけなければならないこと、統制しなければならないこと、そして任せるべきことは何かを検討して、家庭と集団保育の場とがそれをどのように分担するかを明確化することであろう。

なぜ幼稚園が必要か

従来幼い子どもを養い育て、人間として必要なことを教え、その成長をはかることは家庭が行なってきた。それを幼稚園に入れて、特定の時間だけ集団で教育しようとするのはそれなりの意義を認めるからに他ならないのであるが、それをどこに認めたらよいのであろうか。村山氏は保育効果が認められるものとして、音感、リズム感、器用さ、運動神経、知能、社会性、遊びの技術、生活習慣、性格、創作力などを挙げておられるが、(注2)これらの中には真に幼稚園という幼児同志の集団、教師という第三者との出会いの特殊性がいかにされて効果を生んだものとしてよりも、むしろ家庭では経験させにくいことが、幼稚園では経験させやすいことにもとづく効果がとり上げられているように思われる。

たしかに幼稚園の機能の一つは歌唱、リズム、描画、体育的な指導など、家庭ではできにくいことが教えられるという利点がある。しかし最近のように「〇〇教室」が流行してくると必ずしも幼稚園だけのものといえなくなる。第二点は知的な発達をはかるために、さまざまな課題を与え、教授、訓練することがあげられるが、これは幼児期の特殊性、個人差、また教える内容の程度からして、むしろ家庭のように個別指導の可能な場所の方が適確に行なわれるのではないだろうか。第三にしつけの効果であるが、教師という權威にもとづいて、または集団圧

力という外力によって形成される生活習慣であると、行動の容はもたらすことはできようが、そのしつけの効果自体が幼児の人間としての内的成長にどれだけ寄与するかを考えると問題がある。

それでは幼児が集まって教師の指導のもとに活動することの本来の意味はどこにあるのだろうか。私は次の点にその本質を認めたいと考える。

第一に、幼稚園は幼児が親や家庭から離れて、一個の独立した存在として自由にふるまい、自己の世界をくりひろげる場であること。幼稚園は今まで保護され、支配されていた家庭から離れて、一定の時間全く別の社会集団の一員として行動する場面である。そこで大切なことは、親という監督者から教師という監督者にひきわたされるのではなく、幼稚園は家庭とは異なる機能をもつ社会として子どもを迎えなければならないことである。

第二に、幼稚園は家庭とは異なる社会規範をもつところの生活共同体であることである。そこでは幼児ひとりひとりが、今まで家庭で培われて来た社会性、個性を、新しい生活場面に適応させ、必要に応じて変容させたり、新しいものを加えたりしていくところである。ゆえに幼稚園という集団自体が民主的で、建設的、創造的な規範や構造をもたなければならないのである。

第三に、先にあげられたような諸種の効果を個人に生むようなきさまざまな活動を展開する場であるわけであるが、それは幼児自身のことになっているもの（欲求、興味、習慣など）と、幼稚園の物的、環境的状况と教師の方向づけとの出会いの中で展開するものであって、単に教師の意図のみで行なわれるものではないこと。

第四に、幼稚園は単に能力を養うのみでなく、遊び活動を通して幼児に育った諸能力や可能性が実際に生かされ、活用される場であること。保育はその効果を生むためにのみ行なうのではなく、同時に生活そのもの、すなわち過程でもあるのである。ゆえに教師における、人間としてのよりよいあり方への価値志向にもとづく、望ましい社会活動の展開がなされるべき場であることである。

(1) 幼稚園は幼児の公的な世界である

家庭は子どもに種族としての、および文化や社会の伝統を教え、人間として必要な基本的な特性をはぐくんでいる。そこでは子どもは多かれ少なかれ親の個人的影響を受け、個々の素質とあいまって独自の精神を形成していく。親は基本的に、子どもをどのような人間に育てるかのすべての権利と責任をになつており、それが親であることの意味でもあろう。教師や第三者

は親に忠告することはできても、親にそのやり方を変えさせる権利はない。しかし、一度幼児が幼稚園の一員になった時には、園内での行動は幼児自身の意志、教師の方向づけ、集団関係にもとづいて、自由に行なうことができる。幼児が家庭とは違った場面や仕方を選択し、遂行し、評価する活動を通して、一段と人格のわくを拡張、新たな側面を加えることができるのである。

入園後一カ月のころ、始めての保育参観に訪れた母親に自分のロッカーやいすを教え、園内のいろいろな場所に案内している幼児の姿の中に、親に支配されない独自の世界をもった成長への誇りがみられる。教師や仲間という伴侶と共に形成して行く新しい生活への期待を大切に育てなければならないのである。そこでは教師は幼児の支持者や調整者ではあっても支配者であってはならないと思う。ひとりひとりの幼児に人間としての尊厳を育てることが第一の役割であろう。すなわち、家庭で形成された能力や特性が幼稚園という集団の場で生かされる体験を通して、家庭というプライベートな生活の意味を生かし、自信を育てることができるのである。

個人的な体験であるが、かつて幼稚園で居残り保育を受けることを余儀なくされた私の長男は、徐々に午前中の活動で意欲を失い、集団への積極的参加がみられなかった。その後、午後

の帰宅が許され、家庭という自分の城で活動のエネルギーをたくわえる時間をもつことによって、安定した活動をとり戻するという事実につれ、これらのことの意義を深く感ずるものである。

(2) 幼稚園の集団が幼児を規定する

幼児の発達は生活の展開を通してなされるものであるから、集団が個人に何を奨励し、何を制限するかの規範やふんい気が、幼児の集団へのかかわり方を通して幼児のあり方を規定していく。クラスの人数、物的状況、リーダーとしての教師の動き方等によって思わぬ集団効果を生むことがあるのである。その中で望ましい集団状況を維持するために必要な規範のもとに活動させ、社会的な存在として個人に必要な姿勢を形成することがなされなければならない。

それは、個人の欲求や興味を尊重しながらも、他者や集団全体との関係で生ずる葛藤や自分の限界を体験することによって、自己のあり方をふり返らせ、周囲と自己を調和させていくことである。集団内での生活が個人の発展と共に、集団の発展ももたらすものであるという洞察にもとづいた集団指導に導かれて、個人の努力や能力が集団の中で充分に生かされること、集団の意志で目的を達成することなどが体験され、それらを通して、

生活を自分たちの手で形成しようとする積極的な態度が作られることを期待したい。

それには、幼稚園のように一年ないし二年、三年と同じ集団で生活しながら芽生える、心理的結合関係に支えられるような集団の場であることが必要なのである。

(3) 幼児の教育は出会いの中で行なわれる

幼児が何を行なうかを決定するのは、幼児自身の欲求や興味、意図か、物的、集団的刺激の誘発によるか、あるいは教師の考えのいずれか、またはそれらの出会いの中できまる。

幼稚園の教育は、単に幼児に活動の場を与えて自由に活動させることによって、自然な発達を上げさせることでもないし、文化に規定された学習活動による知識や技能の増進をはかるだけでもない。多かれ少なかれどちらかにかたよるのが現状であるけれども、実はその両者の上立った第三の活動の展開が最も重要なものである。すなわち、幼児の意図をよりよい形で実現させようとする教師の働きかけを受けて、幼児の活動は一層充実し、進歩するものであるし、教師から受けた訓練による知識や技能の獲得の結果を、自分の欲求や目的に合わせて活用していくことを通して、与えられたものが真に幼児のものとして内面化するものと考えられる。

それらは、いわゆる遊びの活動の形をとるものであるけれども、幼児が運動感覚的満足や心理的欲求充足をはかるための個人的な遊びから、物に即して展開する遊び、自己の意図で物を変えながらする遊び、共同の目的をもった遊びなど、遊びのいろいろな段階においてこそ、教師の意図的な操作と技能的、知識的指導が加えられなければならない。単なる教授活動による教育は、幼児の能力を育てることはできても、それをいかなる行為につなげるか、自己にとっても、社会にとっても好ましい活用の仕方を子どもに教えることはできない。教師においてのみでなく、子どもにとっても意味のある活動を充分に行なうことを通して、内的一貫性をもった生活体を形成することが可能になるのではないだろうか。

(4) 教育は教師によつてきまる

教育とは本来教育する者とされる者との相互作用であり、教育活動における教師の役割は重大であると同時にきわめて多様である。

幼児の教育に当たっては、まず第一に幼児の欲求充足者として、個別的な幼児の欲求を満たし、どの子どもも満足し、安定して活動ができるようにすること、第二には幼児の活動を促したり、発展させたりするような物的状況を整えたり、働きかけ

をする役割、具体的には教材を整え、場面設定を行ない、活動状態の変化に応じて次々と操作する仕事である。第三には活動に向つづけや意味を与え、かつ認識を育てる役割である。それは幼児が気づかない大事なこと、よいこと、正しいことなどを気づかせたり、教えたり、強化を与えたりして望ましい人間に意向的に方向づけるところの、教育活動における中心的役割である。そこでは、教師ひとりひとりの人間観や世界観の発露があり、そこから後からくる者を自己の信ずることに向けて導こうという教育的行為の大切な部分がある。

現代のように、価値が混乱し、多様化している時代にあつては、何を基盤にして幼児に働きかけるかについての統一の原理を求めることが困難であるだけに、各々の教師の任務が大きい。個人の価値の追求が自由になされている時代であるので、共存する人間同志の眞の福祉を旨とせず、次元の高い姿勢が教師に要求されるのである。

また、このことは幼児がひとりの教師にだけでなく、複数の教師に受容されたり、教師集団として多様な作用を受けることなどを通して、教師の個人的特性から生ずる限界をこえて、一層好ましい影響を受けるように配慮されるべきであろう。それは一対一の私的な師弟関係から多対一、多対多の関係に拡げて、社会的存在としてのあり方の意義を高めることから大切であ

る。したがって、幼稚園では、一人の教師のもとに一クラスがまとまった活動を展開すると共に、いろいろなクラス、いろいろな教師が出会って活動を展開する場面もまた用意されなければならない。

知らないうちに教育の軌道に乗せられ、一生懸命学習し、実践して来たことが、結局は人間社会を滅ぼす方向に向かつていた、というような結果にならないために、われわれは幼児の教育に慎重でなければならないと思う。

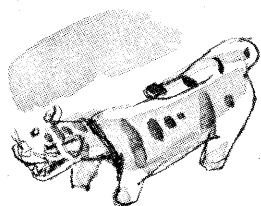
幼児が次の世代をになうために必要だと考えられる能力や技術を教え、社会の進歩にとり残されないようにしなければならぬと考える前に、人間存在として、他の人間や、自然物やさまざまな人工物などの関係と自己の位置を自覚し、その中で眞の意味での自己の存在を主張することができるような、旨ざめた個人の確立を旨ざりたいと考えるものである。

(郡山女子大学)

(注1) 日本保育学会著「日本の幼児の精神発達」フレールベル館 昭和45年

(注2) 村山貞雄著「保育効果の研究」フレールベル館 昭和

育児生活を かえりみて



清水美代子

私が家庭生活に入って、子どもの養育に専念するようになってから、すでに二十数年の歳月が過ぎようとしている。子どもの半数は、二人、または三人の子どもの親になっている。残りの三人も結婚適齢期に入ってしまった。そして私は、思いもかけなかった幼児教育の場に足を踏み入れ、明け暮れ、自分が母親として過ごした生活を、反省する羽目になってしまった。二十年も過ぎると記憶は浄化されて、美しい思い出になるはずのものなのに、育児だけはそうはいかなかった。私にとっても、子どもにとっても真剣に生きた生活の場であるから、昨日の事のような生々しきでよみがえることもある。それに親となった子どもたちからは、身近なことだけに、今日の教育観も加えて、痛い反省と、取り返しのつかない後悔を与えられることもたびたびで、いい加減にできない現在の仕事に対する責任に思い及ぶのである。

若い人たちが子どもを育てている姿を見ると、心から「がんばれ」ともいいたくなるし、美しいとも思う。そしてやっぱり女の人のする事の中で、一番やりがいのあることであり、女の人が一番人間として成長する時だとも思う。そして今の私は、子どもによって育てられたとよく思うし、友だちに会うと、子どもの成長と共に、女性も成長するのだということを、たびた

び感じさせられる。

しかも私はこのほかに、仕事を通して私自身がどんなに多くの恩恵を幼児教育の場から得たかという事に思い当たるので、無事に成人した子どもたちの養育について、大きな助けをしてくださった場を思い返して、感謝の念をささげたいと思う。

幼稚園

私は、一度やめた教職の場に、健康上の理由で復帰し、それが大東亜戦争に続いて、とうとう三人目の次女が一歳半になる終戦の翌日まで続けた。この間、母と、戦場に主人を送り出した妹に、二人の子どもを託して、次女の生後は三人を託して、何の心配もなく職場に出た。母と子どもたちは早くから妹の所に疎開していたが、私と、早くから徴用を受けて軍事工場に出ていた主人は、次女が産まれて、いよいよ空襲がはげしくなってきたから郷里に帰った。その時長女が、「お母さんがいなくても忘れないように、毎日写真を見ていたの」とアルバムを見せてくれた時の、母や妹の配慮に対する感謝と、長女の語り声を今もはっきり覚えていた。

こんな時代でも、郷里の四日市市ではまだ幼稚園を開いていて、長女は、二十分ほどかかる所にある園に通うようになった。

空襲に会う三カ月ほど前だったが、この事で主人のいない妹の家庭は、規則正しい一日のスタートをすることができ、今までの心配性の母からあまり外に出されなかった長女は、二十分ほどの通園で、その間に接する社会のいろいろな物に気づいて、目に見えて成長した。朝は乳母車に残る孫をのせて送る母も、途中に顔み知りができ、長女の友だちづくりに一役を果たしてくれた。ところがある日幼稚園から長女が一人で帰って来たことがあって驚かされた。今の私ならば、ふっと弟や、いとこや、祖母との事が思い出されて帰ったのだろうと原因を考えて連絡をとるのだが、家中大騒ぎしてわがままを叱ったりしたのだった。

行き届いた祖母に育てられた長女は、今でも甘えん坊であるし、長女ならぬ私も、同じような甘えん坊である。幼いころの育児とはこんなものかと、私には厳しかった母の、本質的な人のよさを、今にして思うのである。長女が幼稚園に通い出してからが家中が幼稚園の歌を歌うようになった。子どもたちにはすでに童謡のレコードを買っていたが、それよりも幼稚園の歌を母が孫たちと好んで歌うようになった。以前から私は、幼稚園に子どもが入園する時が、家庭に音楽の入る一番自然な機会として大切に考えていた。しかし現在は状態が変わって、音楽

はテレビ、ラジオ、レコードを通して早くから家庭に入って、その影響で子どもたちは早くから歌うようになっていた。しかし、直接に先生から教えられて、友だちと一緒に歌うという、人と人のつながりの中での営みは、ここで始まり、全くに異った意味を持っていると思う。

これが教育音楽であり、そこに子どものものとしての意義がある。友だちと一緒に歌う喜びを感じさせる方法、好きだった歌がもっと好きになる扱い方、子どもの成長と共にだんだんに触れる音楽がコマーションソングや、テーマソングのほかにあること等々。教育的な立場から見た結び付きが、ここからスタートするものとして、「音楽リズム」が大切な意義をもっていると思う。

長女は幼稚園から帰ると、友だちの名前を口にするようになった。お使いの行き帰りに、母は孫からその家を教えられて、いつの間にか知り合いになったりして、その社交性に驚かされた。長女の話から顔も見ない友だちを話題にもした。子どもの通園から母親もまたそこでいい友だちにめぐり会うことがたびたびで、何人も子どもを育てた私は人さまより多くの幸にめぐり会った。友だちははつきりしてくると、次に母は孫を他

の友だちと比較することを始めた。当時の私は全く第三者的な立場に立ってよく母をとがめた。理屈ではわかっていても、人と比べて遅れているといい気がしないのは人情で、私は時々母を見ていて、このひたむきが子どもを育てるのに必要なものでいかと、自分を反省することがあった。けれどその後、子どもたちを育てた時、やっぱり同じような失敗をしたこともあり、母の事を思い合わせて汗顔の思いで反省したのもだった。

空襲を受けて移った主人の実家の近くには、私立の幼稚園があった。長女はもちろんすぐにそこに入園した。そこで長女は友だちからいろいろの遊びを学んできた。まず縄飛びを始めた。腰ひもで、根気よく飛んだ。まりつき、お手玉、毛糸編みと次次習ってきた。これらの遊びは、私が幼い時、やっぱり遊んだもので、田舎にはまだそんな遊びが残っていた。子どもたちにとっては、近くに田畑もあり、友だちもあり、思い切り遊べる幼稚園もあり、焼けて傷心のおとなと関係なく、大変楽しそうに過ごしていた。

長女の小学校入学を機会に、名古屋に帰った。ここで長男は、少し離れた師範の附属幼稚園に入園できた。十二月生まれではあるが、幼稚園に行ってみると、長男は特に幼く見えた。一直線の道は、途中に踏切りがあり、長い坂道があり、申し分のな

い通園路だった。初めは坂の上まで送った。足の弱い長男はこの坂を長くかかって歩いた。一人で通うようになってからもつらかったらしく、泣き泣き登って行つたと、その近くにお住いの友だちのお母さんから、時々報告をいただいた。そのおかげで、長男は二年間にやっと人並みの脚力と、体力をつけた。

どんなに工夫しても、毎日自然についていく体力を、おとなの力でつけることは不可能だつたと思うし、それにつけても、戸外遊びの少なかつたわが子の成育歴に、大きな欠陥を思つた。

毎日の生活から得られるものが、どんなに大きな役割りを果たしているか、戸外遊びを充分にすることが子どもの体力をつけるのに、どんなにか大切であることを、私は自分の体験を通して知っている。そして、子どもの行動力は、案外と脚力に左右されるのでないかと、長男を見ていて思つた。それから、私は子どもたちをよく外に連れ出して歩かせた。近所の人からも、そのことについては感心もされたし、ずいぶん離れた所の停留所で、知らない人から「いつもたくさん子どもさんを連れていらつしやる方ですね」と声をかけられて驚いたことがあつた。乳母車に一人を乗せ、そのそばに何人も連れて歩いている私の姿が、そんなに人目を引いているのかと、複雑な気持ちだつた。そのおかげで、慣れていることも手伝つて、それからの

子どもたちは、最初から兄の泣いて通つた道を、元気に、途中で友だちをさそつては、しかも、友だちをばげまして連れて行つたと、感謝されたこともあつた。この経験から、私はどの子どもの家に行つても、まず孫を外に連れ出すことを第一にしている。歩き出すと子どもは実に外に出ることを喜ぶ。途中犬や猫に会う事から始まつて、「自動車」「バス」「お花」と呼称しつつ、歩く子どもたちの生命力が、つないだ手から伝わつて来て本当に楽しい。二歳未満の孫が一時以上も歩き続けて驚いた。疲れると休憩をしながら歩くのである。草をつんだり、お茶を飲んだり、車をよけることのほかは、子どもたちに何の悪い影響を与えるものもない散歩道を選んで歩く。そんな時、つくづくと武蔵野を感じて、私自身も楽しんでゐる。

毎日のように、次女を追つて泣く三女は、三年保育のある幼稚園にお願いした。それが、途中で友だちをさそつて通園した子どもで、その強さは、一年間友だちと一緒に生活した幼稚園から受けた送り物である。こんなふうにして、私が子どもを育てる中で、幼稚園は大きな支えでもあり、子どもたちが無事に育つことのできた恩人でもある。長男の所では、三人続いてきた係を、次々三歳保育に出すことにして今年には長男を出した。経済力の低い若い両親は、相当苦しいようだが、子どもが目

立って成長することを喜んで、幼稚園に出してよかったといっている。私は、苦しい思いをしてこそ、したという実感が強いから、がんばって”といっているが、教育はお金のかかるものという常識を、幼児期だけははずしてほしいと思う。

幼児教育の重要さは、まずどの子どもが、友だちと、遊ぶ場と、玩具と、それを見守る子どもがよくわかるおとなが受け止めてくれる場のあることで、両親はその人からいろいろのアドバイスを受けながら、一番望ましい協力を子どものために惜しまないことだと思う。保育者の働きやすい環境から、子どもに暖かい配慮が生まれてくる。正しい判断と、両親への正しいアドバイスは、保育者の勉強できる環境から生まれてくると思う。いずれにしても私は、幼稚園があつたことで、本当に助けられた。現在私と同じような思いで、幼稚園に子どもを出している親も何人かいることと思う。

育児書

終戦と共に家庭に入った私は、その十一月、母をなくした。今まで母や妹に世話になっていたので、何もかも不安だった。衣、食、住のことは、結婚して三年ばかり実際にしているのだからあまり気にならなかったが、子どもたちの教育については、全

く不安だった。泣く子どもが何を伝えているかもわからなくて、一緒に泣きたくなることもあつた。第一、子どもに話の通じる言葉のむずかしさに驚いた。しょうがないので、やっと出て来た本を頼りにした。当時の本は全く悪い紙質のもので、戦後の育児書は等しく、子どもの自由尊重”と、叱らない教育”について書いていた。

子どもたちは母と妹の行き届いた教育で、割合いおとなが扱いやすい子どもたちだったが、三人寄れば予想外の事件続出で、叱らないで”自由を尊重して”と自分にいきかせていても、大声をほり上げることの方が多かったように思える。多忙な間に読む本は、アメリカの訳本が多かつたのだろうか、事例が少なく、むずかしかつた。落ちついて、判断しながら行動するゆとり等ないので、叱らないで”と自分をおさえていると、かえって私の方が精神不安定になってしまう。もう自分流の育児法でいくことにしようと思うと、自分の親のした事がいろいろと思ひ出される。親が自分によくいい聞かせた言葉がつい口に出る。それが子どもに通じない原因であることに気がついたりもした。

こんな中で私は、婦人の友”の再出版を知り、羽仁もと子先生の家庭教育論を知って、いろいろと助けられた。波多野先生

の「幼年期」の出版もあって、どこの母親も同じ思いをしているという安心感を得て落ちついたことも思い返すのである。「婦人の友」は女学校の家庭科の先生の推薦書で、私は卒業してからすぐこの本を読んでいろいろのことを教えられてきた。それにしても、母から叱られることの多かった私には「叱らない教育」が人一倍むずかしかったのだと思うが、いつの間にか、叱る時は叱り、腹の立つ時は怒り、世間普通の母親になって、私なりにこの生活に生きがいを感じていたのだと思う。それであれば、こんなにたくさん育てる気にならなかったと思う。いずれにしても、子どもを正しい人に育てたいと思う心は、母親の祈りでもあるし、それに向かって努力するのは自然の姿でもある。ただ父を早く亡くし、厳しく育てられた私にとっては「叱らない教育」はいまだにあこがれでもある。幼稚園が私の育児にとつては大きな助けであったように、その当時の育児書は私の大切な支えであった。

アドバイス

私の子ども好きなことは、女学校の時に教えてくださった。国語の先生の影響ではないかと思う。その先生は、「良寛さま」「二茶」のことを、実に熱心に話してくださって、強く心を打

たれたことを今でもよく覚えている。しかし実際に年の近い子どもを何人も持つてみると、思いのままにはいかなかった。だから私はたびたび幼稚園の先生に相談にうかがった。あまりに事件が続出するので、子どもの落ち着きがないという考え方に結びつけて、児童相談所にうかがった。そこで先生は「わたしは何をあなたにいったらいいのですか」という意味のことをいわれた。その時私は自分が落ち着きを失って、子どもに眼のどかない事に気づいた。それ以来、自分のことは、自分で処理しなければと、励ますことができるようになった。しかし、自分の考えが定まらない時は、とにかく学校に向き、あるいは相談する場を見つけて、自分の考えを正してみることをしてきた。もちろん今でもその先生は、お元氣でもいらっしやるし、子どもが無事に成人したことをご報告して感謝した。いいアドバイスとは何であるかということを教えていただいた恩人と思っている。

先生

私はよく、子どもたちがお世話になった先生方を思い出しなつかしむ。本当によくお世話してくださったと思う。先生は絶対のたよりだった。どの先生の所にもよく通ってお話をうか

がった。家で手がまわりかねて、どの子も先生方に格別にご迷惑をかけたと思う。子どもたちは、学校の先生のほかに、画とか、習字だとか、音楽とか、いろいろの先生にもついた。主人は私に「教育ママ」というレッテルをつけたが、そこに誠意をもって導いてくださる人があるということ、幼い子どもたちに、そんな人の愛情や、誠意に触れさせることが願いだつた。こんな場では一対一のかかわりがあることを思つてもいた。私は小さい時から先生が大好きだつた。小学校の初めから、父をなくした私は、どの先生からもかわいがられた思い出が多い。学校も大好きだ。母も私の願いを入れて思い切つた教育を受けさせてくれた。

だから、私は教育に対する不信感を持ってない人間である。子どもたちもできるだけ学校に送つた。日本人の教育熱心は、過去の先生方の愛情に支えられた思い出を持つ親の信頼感から出発するものでないかという考え方を、私は今も持っているのである。そして私は子どもが成人したこのごろ、その思いがたしかに実っているように思うのである。私の子どもたちの最後に選んだ勉強は、音楽であり、美術であり、習字だつた。精いっぱい生きていた私のまわりにはそんな家庭的な要素はあつたとも思われぬし、私はそれを目的として考えたこともなかつ

た。ただ兄や姉に手を引かれて、出かけた先に、一人々々を受け止めてくださった先生があつた事だと思ふ。私は母から勉強と勉強といわれて育つた。しかしそのかたわらに、お琴、お花、お茶の勉強も用意されていた。私は子どもに勉強とはいわなかつた。させようと思つて机の前にならんと、側から本を破り、落書きをする妹が現われて、悲劇に終わるのが常識だつた。そんな中で、どの子どもも勉強をしなかつたが大した事ではなかつた。

私は今、何のめぐり合わせか、幼児教育者を育てる仕事をやる羽目になつてしまつた。そして一番思ふのは、子どもを育てていたころの母親の心境である。それに答えられる先生を出したいと思ふ。私の受け持つ教科は「音楽リズム」である。積み重ねの少ない生徒を前にして思い悩むことが多い。しかし私の子どもに示してくださった、一対一の暖かい指導でそのむずかしさを乗り切ろうと思ふ。幼児期の教育が人間の一生にとつて、どんなに大切なものを、子どもを通して知つてゐる私のすることは「音楽リズム」を通して知る喜びを正しく伝えることができる先生を、一人でも多く育てるということである。与えられたこの場で、私はお世話になつた先生方への、感謝の一端を果たすことができたなら、これにまさる喜びはないと思ふ。

字の無い日記

「若い時からの日記があったなら、もっと潤いのあるいい作品が書けたであろう」とある高名な作家が言ったそうです。その人にしては、ましてわれわれにとっては日記を書き続ける事は至難の業であります。

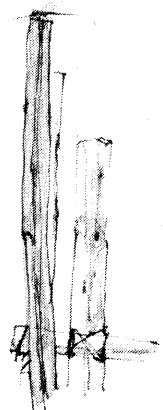
母が日記帳を買ってくれる、自分も今年こそはと決心します。しかし文字通りの三日坊主か、一月も続けばいい方でした。楽しい夏休みも終りごろになると次第に頭が痛くなってくる。たくさんたまった宿題の日記をまとめて書かねばならなかったからです。一口に言えば飽きっぽい性質だったからです。飽きるにはいろいろ理由があります。その一つはあまりにも詳しくあれもこれも書こうとしたからです。朝六時二十五分ごろ目が覚めた。顔を洗ってからお餅を焼くのを手伝った。七時三十分ごろに……” などと元旦には大張切りで書き始める、こんな事

では誰にも続けられるわけは無い。もう一つ、これが最大の理由ですが、今日は暇がないから明日まとめて書こう” という事。それやこれやで書かない日の方が多くなり、いや気がさしてやめてしまうという事になります。

こんなずぼらな私でも、今では胸のポケットに小さな手帳を入れて、これに予定を書き込まなければ暮らしていけません。これに新たな予定を書くついでにその日のおもな出来事をメモしておけば、記録としては充分です。

多くのお母さんは必要に迫られて家計簿をつけています。行事には出費を伴う事が多いから、これさえあればいいながらあったかが正確にわかる。中には、”今日の出来事” という欄があるものもあります。無くてもたたくさんの余白があるから、そこに、坊やはしが治って今日から幼稚園に行き始めた”とか、

降
矢
震



ついでに書き込んでおけば記録としての日記を別に書かないでもすみます。この「ついでに」書く事なら誰にでもできる。改めて日記帳を取り出し、「さあこれから書こう」などと力むから無理が出て長続きしません。なつかしい思い出としての日記なら不完全さを気にする事はありません。特に子どもの場合は予定や家計簿を書く必要が無いのだから、日記を書き続けるのは大変むずかしい事になります。思い出を残しておくためなら別に方法があります。後に記す「字の無い日記」はその一つで、これならどんな三日坊主でも何かのついでに作れます。以下これを作るに至ったいきさつと方法について記してみます。

「なつかしい思い出などと言うのは一種の老化現象である。私は過去を振り返らない事になっている。もちろん日記など書かない」と言って、身のまわりに余計なものを一切置かず、実にはすがすがしい生活をしている人がいます。こう徹底する事ができれば大変幸いなのですが、凡人には中々むずかしい。私など、幼稚園で書いた図画や小学校以来の成績品、教科書、手紙の束や写真帳、旅先で買った郷土人形の数々、苦心して集めた標本類が押入れにいっぱい詰め込んであります。しかし戦後こうした物を保存するのをやめようと考えました。空襲でこれらすべて焼失してしまったからでもなく、前記の人のように悟ったからでもありません。物に執着する事がいかに恐ろしいかを

まざまざと見せつけられたからです。

あの三月十日、私はたまたま日本橋の病院にいました。とてもいけない、と逃げ出した時はもちろんから身です。近くに二月の爆撃の跡の雪解け水の溜りがあり、おかげで私たちは助かりましたが、大きな荷物にしがみついて焼け死んでいく人がたくさんいた。「荷物を捨ててここに入れ」と言われても大荷物を離さない。もし私とその時自分の家から避難していたのなら、やはり大きな荷物をかかえて死んでいたでしょう。

しかし凡人の悲しさ、時がたつにつれて捨て難いものが少しずつ増えていく。写真を自分でとる事はやめたが、記念撮影の機会はある。肉親や友人からの手紙は中々捨てきれないものです。空襲の時の事は忘れてはいないから、なるべくかさ張らぬように気を付けてはいるものの、十五年もたつと段ボール箱に三つもたまってしまいました。日付順に紙袋に入れてあるだけです。それから体積は極小におさえられています。見るには大変不便です。また出したり入れたりする度に折れたりしわになるものが増えています。そこでこれらのうちから貼れるものをより出してアルバムのような形にまとめる事にしました。

写真アルバムだと台紙が厚くて体積が大きくなり過ぎます。市販のスクラップは紙が茶色ハトロン紙で見えしなないし、紙が薄過ぎ、またとじ方が再整理に適しません。そこで心持ち厚

目な白紙のルーブリーフ、A4版と決めました。今ではこれを更にポリエチレン袋をとじたホルダーに入れていきます。よごれない事、はがれにくい事、ハガキのように両面見たい物や手紙、論文別刷のような小冊子等は貼り付けずにただはさみ込めばよいので大変便利です。また未整理のものも、日付順にこの中にに入れていけば、別に紙袋に入れる必要ありません。

旅行の記録を帰った後で書く事は中々むずかしい。夜、あちこちに便りをするついでに絵ハガキの通信欄に簡単にメモするぐらいは誰にでもできます。宿の領収書の余白に、帰りの車中でいろいろ書き込むというでもあります。宿の名、地名から年月日その他いろいろの記載がすでにあるから、自分で書く分はごくわずかですみます。遊覧バスの記念乗車券には回遊先の道順が図示されているものもあり、多くは日付印がおしてあるから、自分で何も書く必要が無いくらいです。

同窓会や送別会の通知ハガキの余白に何か書き込む。通知状が無いとか大き過ぎる時には宴会場の名入りの箸の袋やマッチの箱にメモするのも中々面白いものです。見て楽しむものから、こういった工夫をする。押し花などもその一つです。生まれて初めて踏んだ外国の地、ハワイの空港でサーピス嬢が胸に付けてくれた小さな蘭、氷河の傍に咲いていた雑草、いずれも旅先の事ゆえ手帳に挟んだだけの不出来のものです。記念

としては充分です。ブドー酒の瓶の鉛の口金を平らにして貼り込んだのもあります。

多勢での旅行のあとを、それぞれがとった写真を集め、希望のものを注文する事が多い。直後は印象が生々しいからつくさん申し込むという事になります。後になってその中からただ一枚だけこの「字の無い日記」のために選ぶという事になると、結局は代表的な風景を背にした全員揃った記念撮影が良いという事になります。あとは普通の写真アルバムに貼ればよい。写すのは若い人が多く、どうもこうした野暮ったいものは撮りたがらないし、また努力しないとそういった機会が無いものです。そこで年上の私などが「せめて一枚くらいは全員でとろうよ」とすすめる。自由を束縛されてブツブツ言うのもいるが、後に希望者をつのればほとんど全員が申し込んでいる。結局は年の老若にかかわらず思いは同じらしいです。

案内所でくれるパンフレット、特に県庁や市役所が腕によりをかけて作ったものには素晴らしい印刷のものがあります。これ全体をはさんでもよいが、この中から自分自身で実際に見た風景なり建物だけを切り抜いて貼るのも良いものです。なまじか絵葉書や写真よりも美しいし、第一アートペーパーだから厚くなりません。最近では「風景タバコ」というのが売られています。これも、これなども全体に変化を与えるし、厚くもなりません。

あとになって見ると、何でこんなものを貼ったのか、とバカバカしくなるものもあり、反対に当時は何気なく捨てたものが後には意味を持ってくるものもあります。先年本の間からしおり代りの古い紙片が出てきました。昭和二十三年十一月の俸給の内訳書です。日付から察すると、無給副手から有給になった最初のものでした。青と赤のインクで書かれたきわめてわずかな金額は、当時のインフレをまざまざと思い出させるものでもあり、早速貼り込んだのは言うまでもありません。

手紙、ハガキ等はある意味では「人が書いてくれた日記」でもあります。なつかしい思い出というだけでなく、自分に関したさまざまな行事が記されており、友人との手紙から当時の自分の考え方、行動を間接に知る事ができます。

要するに私の「字の無い日記」は、普通の日を追って自分で字で書き綴った日記ではないという意味です。印刷され、あるいは人の書いた字のほかに自分で書き込んだメモもたくさんあります。まざままの材料さえあれば、一月後でも、五十年たつてからでも、いつでも作れます。普通の日記は、後にまとめて書く事はむずかしいが、これの整理は時がたつほどよくなる。ルーズリーフを使っているから、思い付いた時、暇な時に気楽に貼り直しができます。時として追加するものもあるが、全体としては再整理することに濃縮されていきます。

ホルダーそのものがわずかにセンチの厚さですから、二十葉の白リーフ表裏に貼り込んだものを挿し入れても三センチを超える事はありません。現在三十冊ぐらひありますが、その幅は一メートルにおさまります。中には無用のものもたくさんありますので整理すればこの半分ぐらひにはなるでしょう。

右の「字の無い日記」そのものの形は、一種のアルバム、スクラップブックにすぎません。違う点は、大きな免状とかメダルのようなこの中に納まらない物は別にして、自分の思い出がこの中に全部濃縮されている事であり、ある人が「君がもしロビンソン・クルーソーのような孤独な生活をせねばならぬとしたら、一番ほしい物は何か」と聞かれたら、即座に「エンサイクロペジア・ブリタニカ」と答えたそうです。現在の私も同じように問われたなら「この「字の無い日記」です」と答えるでしょう。

この「字の無い日記」は「自分だけで見るアルバム」ですから、私が死ねば無用になります。せがれや娘は、自分の写っている写真ぐらひを残して他は処分してしまうでしょう。しかし、もしこれらを保存し、通覧するならば、この親父の戦後からの全生活と、そのすごした時代の背景をも知る事ができるはずです。

残念ながらこの「日記」は後になって出て来たわずかなもの

を除いて戦前の分はありません。もしあったとしたならば、その分の資料だけを紙袋に整理すれば、ふるしき包につくらしい、リーフに貼っても案に一回で運べる量になるでしょう。しかし実際にはあまりにも多くの品々をしまつて置き過ぎました。三月から私の家が焼けた五月の末までに何回も郷里に帰っているのですが、何一つ持って行かなかつた。そのように大量の物を整理する気力も無い。すべてを放棄しようという心理状態にならざるを得ませんでした。

「必要にして充分な最小の量」という心得はすべての生活において必要な事です。空襲や火事等は例外ですが、この住宅事情、転勤等のためのたびたびの引越し。私たちの学会での講演も、予鈴と本鈴できわめて短時間に制限され、その中に必要にして充分な内容を述べねばなりません。三十分も祝辞をぶち続け、司会者を困らせる長老たちの育つたような「旧きよき時代」は去つたのです。この事はおとただけでなく子どももその例外とはなり得ぬ時代になってきたようです。

子どもは親に似ると言います。うちのせがれの引き出しの中は、図画や、スタンプをおした紙片、クレヨン、ドングリ、蟬の抜け殻等が雑居してまるでバタ屋の籠です。自分の所では置き切れず、家内の棚まで占領しつつあります。何とかして「必要にして充分な最小の量」の考えを教えようと考えたが、これは

無理のようです。私自身二十歳過ぎてから、空襲という特殊な体験から初めて気が付いたのですから。夏休みの日記に苦しむあたりも、四十年前の自分の姿を見るようです。去年の夏、この「日記」方式を教えた所、大変気に入つたようで、あれこれベタベタと貼り付けていました。こうした事から整理する習慣がつけばいいと、大いに奨励しようかと思いましたが。反面、子どものころから「なつかしい思い出」などと考える事は病的のような氣もします。幼児教育の専門家にお聞きしたい所です。

せがれも年を取つてから親父の「日記」のようなものを作りたいと思うかもしれません。今いらな思つても、後になつてあればよかつたと思うような物は大体見当はつきます。こういった物も、わずかずつではありますがいでにいろいろとメモして、この「日記」にはさんであります。

深夜、仕事に疲れて一服する時、この「日記」を取り出して見ていますと、何となく気分がしずまるような氣がします。そうした時、始めに書いた作家とは別の意味で「もし幼時からの分が揃つていたら、よりなつかしい思い出となつたであろう」と思うのです。

(千葉大学病院)

倉橋賞受賞にあたって

堀 端 孝 治



第25回日本保育学会において発表いたしました「小児の精神発達に関する追跡研究」第5報に対して、はから

ずも名誉あるそして伝統ある倉橋賞を受賞いたしましたことは研究者として大へんありがたく思っています。のちのべますように本研究のいと口についたばかりで、これからの研究であって、他の立派な研究内容と比べて大へん恥ずかしい限りであります。反面、このような息の長い研究はこれから大へんだから激励を兼ねて賞を与えようとの趣旨であったのではないかと理解しています。

受賞当日は大学の仕事で遅れて発表時間ぎりぎりにかかけつけ、発表を終わって昼食後、少し過労ぎみであったため、総会を休んでしまい、皆さまに大へんご迷惑をおかけしてしまいました。とりわけ主催の大阪樟蔭女子大

学の皆さま方にはいろいろのご配慮をいただきありがとうございました。

この研究は多くの研究者が一緒になって取り組んで、子どもの成長・発達の過程とともにいろいろな問題行動の発生のしくみや心身の障害の成因などを明らかにしようとしています。が、研究者のほかに事務整理・連絡などをしていただいている名古屋市当局の方々やアルバイトの学生のみなさんの、陰の力が大きく働いて成果が出てきたものですので、賞を受けたのは私ではなく、これらの皆さまの力があったものと考えてともに喜びあっています。そして今後一そう皆さまの力に支えられて研究を進めていきたいと決意を新たにしています。

保育学会の皆さんのご激励とご指導を今後ともお願いいたしますとともに、ご発展を祈るものであります。

小児の精神発達に関する

追跡研究

堀 端 孝 治

1 はじめに

私たちがこの研究を始めようという話し合いは、医学と心理学の研究者が中心となって昭和38年9月はじめにあった。そのきっかけは昭和38年7月に名古屋市青少年問題協議会内家庭教育振興委員会において「青少年の非行化防止の対策」「心身の発育障害についての対策」を諮問された。その時、一部委員の間で、このような心身の発達における障害やゆがみは、今日の専門研究者でもその発生原因について、また発生のメカニズムについて十分解明されていないので、行政当局がほんとうに専門家に諮問しているならば、本格的な研究にとりくんでいくことが必要であるとして、本追跡研究委員会を作るよう答申した。

こうしてわれわれは、名古屋市当局の理解のもとに正式テ

マを「小児の心身発達に関する追跡研究」ときめ、一年間にわたって研究体制づくりと研究計画・内容について三十回ばかり討論を行なった。精神医学の岸本鎌一教授をリーダーとし、丸井文男教授、小児科学小川次郎教授、産科学渡辺金三郎教授と各教室の若手研究者が一致協力して準備した。

そこで、本研究のねらいは、胎児期より成熟期に至るまで同一人の精神的、身体的発達を多面的、継続的に追跡研究をなし、① その発達過程およびパーソナリティー形成の過程を明らかにするとともに、そこに働いているいろいろの要因をも明らかにする。② また、その発達過程にみられるいろいろの心身の特異現象、あるいは異常行動の成因あるいは病因を解明しようとするものである。

このようなねらいを果たすためになぜ追跡研究のような手間

のかかる方法を用いるのかといえ、人間研究は自然科学のよ
うな真の意味の実験ができないからである。今日、宇宙時代と
いわれ、科学技術が発達しておりながら、反面、人と人との争
いや誤解にもとづく憎しみはふえこそすれ減ってはいない。こ
れは人間についての科学的研究がまだ十分発達していないこと
を示している。心理学についてその研究法といえ、実験的方
法による多くの手続きがあり、テストや質問紙調査などの横断
的研究が多く用いられている。あるテストについて5歳児群の
平均値と7歳児群の平均値とを比べると、得点は7歳児の方が
よくなるのは当然で、どうしてよくなったか条件が説明できな
い。また現在5歳の子が7歳になったとき、現在7歳の子と全
く同じ得点をとるとはかぎらない。それはなぜかという説明が
できない。

また、臨床心理学では逆行調査による方法が事例研究におい
て用いられている。これは問題行動の解明と診断において必ず
用いられており、本人あるいは保護者がカウンセラーあるいは
研究者に過去の追憶を手がかりとしてのべるとき、またカウ
ンセラーや研究者が専門的にいだいている仮説にもとづいて質問
するとき、無意識に誘導され、真相とはちがった回答をしてし
まいがちになるのである。このような錯誤の入り込みがちな逆
行調査も科学的研究法としては十分でないといえよう。

このように一回かぎりの対応のない資料を用いる横断的研究
法の欠点や、過去にさかのぼって追想にたよる逆行調査法の欠
点をもたない研究方法として、追跡研究法による自身の発達の出
明をなしたいと考えたのである。このような研究は日本でも狩^{注1}
野^{注2}、三宅和夫の研究があり、アメリカではターマン、ゲゼ
ル、ケイガンら多くの研究がある。これらの研究は多くの貴重
な資料を提供しているが、出生後の発達についての研究が主で
ある。

そこで、われわれの場合、人類遺伝学、人体発生学、産科学
などの研究者の協力により胎児期より研究を始めたのである。
そして現在18歳に至るまで約二十年間継続して研究を進めてい
く予定である。そのために問題点がいろいろあると思われるが、
とくに次の二点が指摘されよう。一つは対象児の脱落防止とい
うことであり、もう一つは計画立案した研究者が、すべて研究
終了まで継続していけないので研究体制の強化ということであ
る。

2 研究方法

(1) 研究対象

本研究でははじめ妊婦を対象とした。昭和39年9月より12月
に至る3ヵ月間に名古屋市長域にわたって産婦人科病院と助産

院で妊娠3ヵ月から5ヵ月と診断され、調査に協力を受諾した妊婦一、八五七名であった。

(2) 研究調査時期

妊娠時(胎児期)から6歳児期まで十回にわたって調査してきた。妊娠時、出産時および新生児期、1ヵ月児期の三回は、医師所見記入用紙と、母親記入用紙にわけて病院または産院にて実施した。第四回目から名古屋市内の各保健所で医師、心理学者、保健婦によって検査、調査を実施した。母親記入の用紙も毎回配布した。第四回は5ヵ月児期で、以後1歳児期、2歳児期、3歳児期、4歳児期、5歳児期、6歳児期と毎年5月、8月に実施してきた。ただし、6歳児期には約半数は小学校に入学したため、保健所での医師検診のほか、小学校教師による所見を求めた。今後も医師による身体的検査、教師と母による行動発達・パーソナリティー発達に関する調査、家庭環境調査などを行なっていく予定である。

(3) 資料分析の方法

同一の個人についての資料を追跡センターに保管しているが、すでに個人ごとに約一、二〇〇項目について調査されている。これらの調査結果は相互にどのように関係しあっているかを縦

断的分析法として考案された一般化されたロジスティック分析法^{注3}によって統計的に分析した。

また、統計的分析が困難な資料については一つの特異行動をなす個人ごとに縦断的に分析し、その中から共通条件を探し出す方法をも用いて研究している。

3 研究調査の結果

二十年にわたる研究の約三分の一を経過し、その中間報告にすぎないが、第21回以来保育学会で発表してきたものも含めて結果を示すことにする。

(1) 対象者のその後の推移

はじめ妊婦一、八五七名を対象としたが、転居や流・死産などによって出生児は一、七三九名(双生児六組を含む)であった。表1にみられるように調査ごとに対象者は変動し、減少していった。とくに、妊娠時から出産時に減少が目立っているのは実家に帰って出産したことが原因である。脱落者はこの七年間に七四七名で、妊婦数の約四割の脱落率は研究調査発足時に推定した率とほぼ一致していた。すなわち、昭和39年4月入学の名古屋市児童の中、名古屋生まれのものは六割強であったので、本研究における脱落率は四割を予想していたのである。

表1 対象児の推移

| 調査時期 | 調査者 |
|--------------|------|
| 妊娠時 | 1857 |
| 出産時 (新生児) | 1404 |
| 1ヵ月児 | 1486 |
| 5ヵ月児 | 1389 |
| 1歳児 | 1367 |
| 2歳児 | 1189 |
| 3歳児 | 1076 |
| 4歳児 | 803 |
| 5歳児 | 729 |
| 6歳児 | 870 |

いずれにしても毎回、調査に協力できないものが二百数十名から四百名ものがあったことは実施方法に問題点があったと反省している。とくに4歳、5歳の時点で急増したことは幼稚園に入り、保健所へ親子で訪問することに抵抗をもつようになったのではないか。

なお、市の周辺部の団地の多い守山区、千種区、昭和区、緑区はかなり市外転居が多く脱落率が高かった。また、旧市内の中区、西区、東区はやや商家の手伝いが多く、回答なしの方が多かった。

妊娠誤認10例、流産13例、早死産38例、新生児死亡10例、乳児死亡12例、幼児死亡(2歳)1例が脱落の中に含まれていた。

(2)未熟児の発生要因

ここでとり上げた未熟児とは在胎週数のいかんをとわず、生下時体重二、五〇〇グラム以下のものをいう。未熟児出生数は

一、七三九名の中、一二〇名あり、その中、二七名は出産時の医師所見がないため、九三名について妊娠時、出産時における調査にもとづいてその発生原因を分析した。

未熟児という被説明変数に対してその原因と思われる説明変数として次の調査項目を考えた。

① 妊娠前から出産までの項目では、社会階層、妊婦の年齢、妊婦の職業、夫の学歴、妻の学歴、妊婦の慢性疾患、妊娠中の精神的ショック体験、初経産別、妊娠3ヵ月までのビールス性疾患、ホルモン剤やトランキライザーなどの薬品使用、晩期妊娠中毒症

② 分娩時における項目では、在胎週数、胎盤異常、先天性疾患 以上14項目

これらの項目を3項目ずつ組み合わせ58組について前に述べたロジスティック分析法によって被説明変数の未熟児の発生によくきていると考えられるものを選び出した結果、大へん強くきているのは、在胎週数が38週以下で、妊婦が結核とか心臓病とか何らかの慢性疾患をもち、晩期妊娠中毒症にかかった場合であった。ついでややきているものとして、妊婦の年齢が30歳以上で、初産であつて、社会階層がブルーカラーであつた場合であつた。その他の項目は出現頻度が少なかった例もあり、有意な差がみられなかった。とくに妊娠中における精神的

ショック体験のような心理的要因は有意差がみられず、母体の健康状態の方にはつきり有意差がみられた。

(3)未熟児のその後の発達

① 未熟児の4歳に至るまでの人数の推移

一二〇名の中、出生日に死亡したものの四名、5ヵ月に至るまでに死亡二名、計六名死亡。全対象児の死亡数（4歳まで）二名とくらべてかなり高い。そのほか、市外転出のため二九名脱落。したがって残り八五名が追跡続行中である。

② 未熟児の身体発育の特徴

a 未熟児の四年間の身長および体重の発達の相関

未熟児の身長と体重がその後どのように発達したかを各時期ごとに相関をとってみたのが表2である。生下時の身長も体重もその後の各時期とは非常に低い相関を示しているが、生後5ヵ月時の身長・体重はその後の身長・体重とかなり高い相関を示しており、さらに1歳時に至るとその後の各時期とも非常に高い相関を示している。このことは未熟児で生まれても生後5ヵ月間の身長・体重の発育をみれば、その後の発育は大體予測できるのではないかとということがわかる。

b 在胎週数別にみた未熟児の発育

未熟児を38週以下と39週以上にわけて4年間の身長・体重の

発達をみると、38週以下の在胎週数の少ない未熟児は生後5ヵ月ぐらゐまでは劣っているが、1歳になると身長も体重も39週以上のものよりまさってくる。とくに、身長は有意差がみられる。

c 4歳児の身体発育不良群内における未熟児

4歳児の全追跡対象児八〇三名について、体重・身長・胸囲のZ得点をつけ、それぞれマイナス一・五以下であった三七名を抽出して発育不良群とした。(表3)そのものたちは何歳のころから発育不良群になっていたかを示したが、未熟児はその中約二割含まれ、それはすでに生後5ヵ月よりみられ、未熟児のその後の発育のよくないものは早期よりはつきりみられるのに対して非未熟児では多くが2歳ごろからはつきり表われてきている。全体的にみれば、身体発育のよくないものが1歳から2歳にかけて多くあらわれてくるといえよう。また、八名の未熟児の中、六名は在胎週数が40週以上であり、一名は39週、残り一名は32週であった。

以上、未熟児の身体発育をみると、在胎週数によってややちがった発育がみられる。一般的に38週以下のものははじめ5ヵ月ごろまでは体位はまだ劣っているが、その後、急速に発育していくものが多いのに対して39週以上のものは発育が停滞きみで1歳以後4歳にいたるも発育のやや悪いものが多くみられる。

表3 4歳における
発育不良と未熟児

| 時期 | 未熟児 | 非未熟児 | 計 |
|------|-------|--------|---------|
| 5ヵ月 | 4 | 3 | 7 |
| 1歳 | 1 | 2 | 3 |
| 2歳 | 3 | 13 | 16 |
| 3歳 | 0 | 5 | 5 |
| 4歳 | 0 | 6 | 6 |
| 計(%) | 8(22) | 29(78) | 37(100) |

表2 各時期における未熟児の発生の相関値
身長

| | 生下期 | 5ヵ月 | 1歳 | 2歳 | 3歳 | 4歳 |
|---|------|------|------|------|------|------|
| 0 | — | 0.35 | 0.32 | 0.22 | 0.09 | 0.17 |
| 5 | 0.35 | — | 0.80 | 0.50 | 0.31 | 0.45 |
| 1 | 0.32 | 0.80 | — | 0.60 | 0.65 | 0.44 |
| 2 | 0.22 | 0.50 | 0.60 | — | 0.86 | 0.88 |
| 3 | 0.09 | 0.31 | 0.65 | 0.86 | — | 0.89 |
| 4 | 0.17 | 0.45 | 0.44 | 0.88 | 0.89 | — |

体重

| | 生下時 | 5ヵ月 | 1歳 | 2歳 | 3歳 | 4歳 |
|---|------|------|------|------|------|------|
| 0 | — | 0.31 | 0.10 | 0.27 | 0.13 | 0.22 |
| 5 | 0.31 | — | 0.72 | 0.59 | 0.66 | 0.69 |
| 1 | 0.10 | 0.72 | — | 0.74 | 0.82 | 0.77 |
| 2 | 0.27 | 0.59 | 0.74 | — | 0.81 | 0.71 |
| 3 | 0.13 | 0.66 | 0.82 | 0.81 | — | 0.84 |
| 4 | 0.22 | 0.69 | 0.77 | 0.71 | 0.84 | — |

全対象児の中で未熟児は5ヵ月時に一三名発見され、そのうち二名は遅滞が1歳以後なくなったが、一名は4歳に至るもかなり遅滞が著しく約半数の五名は精神薄弱児と考えられる。身体発育と同様、2歳以後には発達遅滞児として新たに入っていない。さらに、未熟児で精神発達良好群についてみると、1歳ごろから徐々に増えてきており、4歳時では一四名になっていて、未熟児出生群であるからといってとくに少数とはいえない。そこで、未熟児を精神発達の遅滞群、良好群と中間群の三群

また、そのような発育のしかたはすでに5ヵ月時にかなり正しく予測できそうである。しかし、38週以下のものにも少数ながら早くから発育の遅れの目立つものもある。

③ 未熟児の精神発達の特徴
生後5ヵ月時の医師所見、1歳時、2歳時、3歳時、4歳時における親による報告および行動観察による心理学者所見によって精神発達の一定規準にもとづく評価と乳幼児精神発達検査の結果とにより判別をなした。

にわけて、かなり資料の揃ったもの二二名の妊娠中から3歳に至るまでの精神発達に影響していると考えられる74項目を比較し、遅滞群に共通した傾向があり、しかも良好群ではその逆の共通傾向がみられる項目を抽出することによって、未熟児の精神発達に關係する要因ではないかと推定できた。(その項目は表4参照)

(4) 4歳、5歳における精神発達遅滞に影響していると思われる要因

乳幼児精神発達診断法(津守真)によって診断できた4歳児七九八名、5歳児六八〇名の平均得点より1.0 σ 低い得点のものを発達遅滞とした。4歳児では一一八名、5歳児では一一〇名を選んだ。個々の遅滞児の胎児期より3歳に至るまでの環境条件、発育状況に關する18項目について3項目ずつ組み合わせて、ロジスティック分析法によって分析した。

被説明変数である発育遅滞に対してその原因と思われる説明変数の中、かなりよく説明しているとして有意差がでてきたのは4歳では、3歳における社会的行動のおくれを示す、外で友だちと遊ばないこと、生後10ヵ月以後になってやっとはいはい行動がみられたこと、生後5ヵ月以後にすっかり首がすわったことの運動発達のおくれがみられた。また、5歳でも同じく3

歳における社会的行動のおくれや1歳までの運動発達のおくれが強く影響しているほか、2歳における排便における予告のおくれや生後5ヵ月ごろの乳のみ方がよくなかったことなどがややきいていっているという結果がみられた。

これらの結果は、3歳までの精神発達によくきいていた妊娠中の条件、分娩時の異常や新生児期の異常条件がほとんどなくなり、乳児期から幼児期の発育条件として運動発達や社会的発達の内容が大きききいていことが特色づけられている。

しかし、これは発達遅滞の要因を分析したものであり、発達促進の条件をとつてみたとき、同じ条件となるかどうかは不明である。

4 今後の課題

以上、昭和39年以来、実施してきた本研究の中間報告の一部をまとめて報告したが、本研究のねらいをまだまだ十分果たしていない。とくに研究方法については現在ロジスティック分析法のほかよいまとめ方を見いだしていないが、それによって未熟児発生の要因の分析を試みた。今後はいろいろの異常行動や情緒不安の発生要因についての分析を試みると計画している。

さらに、母乳中心に育った子や人工栄養で育った子の心身の発達にどのような特徴がみられるか、共働きの子や一人っ子の精

表4 4歳・5歳の精神発達遅滞の分析項目

| 調 査 項 目 | (-1) | (+1) | 0 |
|-----------------|------------------|-----------------|--------|
| 1. 母の出産年齢 | 30歳未満 | 30歳以上 | N R |
| 2. 母の学歴 | 高校卒以上 | 中学卒 | N R |
| 3. 母の既往症 | なし | あり | N R |
| 4. 妊娠中の風邪経験 | なし | 妊娠3～5月あり | N R |
| 5. 初経産別 | 経産 | 初産 | N R |
| 6. 晩期妊娠中毒症 | 罹患なし | あり | N R |
| 7. 中期以後性器出血 | なし | あり | N R |
| 8. 出産後1ヵ年の母の健康 | 健康普通 | 病気がち | N R |
| 9. 出産後1ヵ年の育児感想 | 順調・その他 | 困った | N R |
| 10. 5ヵ月時乳ののみ方 | よくのむ | あまりのまぬ その他 | N R |
| 11. 首の坐り | 生後4ヵ月 までにすわる | 5ヵ月以後す わる | N R |
| 12. はいはい行動 | 生後9ヵ月ま でにみられる | 10ヵ月以後に みられる | N R |
| 13. きき手(2歳) | 右きき | 左きき・不定 | N R |
| 14. 大・小便の予告(2歳) | ともに教える | その他 | N R |
| 15. 睡眠習慣 | おしめ不用 | 必要・その他 | N R |
| 16. 遊びの行動 | 友と外で遊ぶ | 一人で遊ぶ その他 | N R |
| 17. 家族形態 | 核家族 | 拡大家族 | N R |
| 18. 同胞 | 兄弟姉妹あり | 一人っ子 | 弟妹のみあり |

神発達の特徴、あるいは情緒不安や異常行動の特徴がみられるか、などいくつかのテーマが考えられている。がしかし、どのテーマ一つを分析するにもかなりの時間がかかるため、現在集計がかなり遅れているのが実状である。

また、本研究において重要なことは、研究協力をいただいている対象児とその両親に対する教育的配慮を行なっていくことである。今まで母親に対して育児相談を医師と心理学者とタイアップして行なってきた。また、パンフレットによる質問に対する回答をなしてきた。現在では、追跡対象児が小学校に入ってきたので、教師からの相談にも応じて研究を継続していくべく準備している。このようなことは研究の客観性に問題があると思われるが、対象児が拒否して研究が継続できなくなることと比べて教育的条件が加わってもよいのではないかと考えている。

(愛知教育大学)

注1 狩野広之「知能の逐年的研究」

2 三宅和夫「発達研究とその方法論に関する考察」北海道大

学教育学部紀要20号一九七二年

3 伊藤孝一(南山大学) 計数データ分析の一方

(1) 「アカデミア」第54輯 南山学会編昭和41年

(2) 「アカデミア」第71輯 右 同 昭和44年



洋書紹介

Young Children

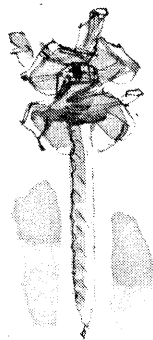
Jan, 1971

— Who Cares for America's

Children ? —

by Urie Bronfenbrenner

江波 諄 子



一九七〇年の十一月に N A E Y C (National Association for the Education of young children) の例年の会議が、東部の古い都市ボストンで開かれました。初めて幼児教育関係の全国的な会議に出てみることにした私は、そのころいたペンシルヴァニア州のステイトカレッジから、そのナースリースクールで働く人々とともに十時間余りのドライブをしてボストンについていました。集まった人々は全国いたる所からで、その半数以上は女性のように、派手な色の服に身を包み、互いに活発に口を動かしているこの大きな集団のどよめきは、何となくこの国の幼児教育界そのものの姿を象徴しているように思われたのを、今でも覚えています。

今回は、その中行なわれた講演のひとつが翌年の一月に雑誌「Young Children」に掲載されており、ご紹介し、そういった会議の中で人々は何を言い、何を聞いたかのぞき知ることにより、私たち自身が直面している、また今後直面するであろう問題の役にたつたらと考えております。

講演者のブロンフェンブレンナー教授はコーネル大学の心理学と人間発達・家族研究科の教授で、同年に開かれた White House Conference の児童部門では議長をつとめた人です。

彼はその日のテーマを「誰がアメリカの子どもを守るか」として次のようなことを呼びかけました。以下はその中からの部

分的な拔萃です。

「アメリカの家庭とその子どもたちは問題をかかえています。その問題は大変深く、広く、われわれの国の未来に対して恐れ
の念をいだかせるものです。問題の根源は、全国で子どもが無
視されていることにほかありません。つまり、根本的な保護が
欠け、親というものの存在が無視されているのです。

われわれは、アメリカという国を子ども中心の社会と考えた
いと思っている。しかしこういっても、行動はいつも言葉と逆
です。施設や日常の生活を厳しくみてみると、われわれの社会
が優先しているものは、子どもでなくてほかの何かである。富
を求め、物質を尊重し、人間関係に代わるものとして機械技術
を喜んで受け入れ、家族を保護することもしないで単に責任の
みを押しつけ、その結果犠牲がでるとそれを責める。……国家
の美辞麗句はともなわず、アメリカの現実の生活のパターンの
中で、家庭や子どもはいつも最後にとり残されている。われわ
れの社会はまず最初に市民の職業の需要がみたされているかに
関心があり、次に社会の義務を果たすことである。子どもへの
関心ももちろん考えられてはいるが、それは暇な時にするくら
いなものである。……

今日の世界では、親は無慈悲にも社会の抑圧をうけ、子ども
とおとなをより意味深い関係にするための時間や場所がゆるさ

れていない。そのために、親としての役割や機能は低下し、子
どものよきガイド、友だち、仲間として親はやってあげたいこ
ともできなくなる。この不満は貧しい家庭にことに大きく、空
腹や風邪、不潔や病氣、失望などによって、人間としての基本
的生活までも脅かされている。……

仕事のために、食事の時間や夜の団欒や週末までも週日と同
じように使われ、人々は前進するために、いや現在を維持する
ために夜も外で過ごし、少しでも余った時間は社会や地域の義
務のために使われる。すべてこれらのことは最低限の責務とし
てやらなければならない。子どもたちは多くの時間を自分の親
よりベビーシッターと過ごすことになるのである。たとえ親が
家にいる時でも、やむにやまれぬ用事などがあり、家族間のコ
ミュニケーションは断絶される。テレビは創造的に使われれば
子どもや家族の活動を豊かにするが、現在のところはむしろ害
にもなっている。テレビは魔力的な文字やぞっとするような行動
でもって、その魅惑が終わるまでわれわれの生活を無言の状態
にしてしまう。テレビの根本的な危険性は、それが製作された
ものにあるのではなく（あることはあるが）むしろそれが阻止し
てしまうものにある。談話やゲーム、家族のさわぎや論争など
を通して、子どもはさまざまなことを学んでいき、そういうこ
とを通して彼らの人格が形成されていくのである。テレビのス

イチチを入れることにより、実は子どもを人々 (People) の中に移す過程を断ち切ってしまうのである。……

多数の要因が子どもをその他の社会から孤立させている。核家族、住宅地と商業地区の分離、近所の人々をみることもなく、小さな店が減少し、スーパーマーケットがそれに代わり、職業上の移動も増え、徒弟制が廃止され、合同学校、テレビ、電話の普及、交通も単に歩くことに代わって自動車が使われ、異なった年齢グループの社会生活のパターンが分割され、母親は働き、子どもは専門家にあずける。すべてこういった過程の徴候が、子どもが年齢の違った人々と接触する大切な機会を少なくしているのである。……

子どもたちは人間 (human) となるために人々 (people) が必要なのです。……親から子どもを孤立させてしまうということは、同時に社会の中の個人として、その中で生きていく者としての子どもの成長を脅かしているのである。若者は自分自身をブーツのひもで引き上げることができない。ふつうは自分より年齢の上の人や下の人をみ、ともに遊び、働くことによって自分には何ができ、自分はどんな人間になれるか発見し、自分の能力や自主性をのばしていく。そしておとなや年齢のちがう子どもたちに出会い交流することによって、新しい興味や技術を修得し、耐えることの意味や協調や同情することを学んでい

く。つまり子どもを彼らだけの世界に追いやるという事は、子どもから人間性を剝奪し、同時にわれわれ自身からも人間性を奪い奪っていることなのです。にもかかわらず、これが現在アメリカでおこっていることです。われわれは人間を人間らしくする過程を破壊しつつあるのです。……われわれが優先すべきものを他のどこかに決めることによって、そして子どもや家庭を最後にもつてくることにより、子どもから標準とか保護を奪い、われわれ自身の生活を貧しくこわしていく。

このように優先するものが逆になっていること、つまり子どもたちが裏切られているという事は、アメリカ社会のあらゆる面で若い人々の間に育ちつつある迷いや疎外感のものになっている。家庭や近隣社会が重要だと考えられている環境から来た人々は、彼らの不満をおおやけのサービスなどを通して肯定的な建設的な方法で解決しようとする。しかし孤立した環境から来た人々は単に自分たちのいた環境を冷淡な無責任な残酷なものとして打ちかかるだけである。異った絶望的な社会の一部で、若い人によって象徴される破壊や乱暴をわれわれは許すことができない。だが現在のわれわれの価値感が逆にならないかぎり、この崩壊していく過程は一層深い根をはりつつあるのであろう。……若者の疎外感や無関心、ドラッグは急増していくであろう。そしてわれわれも子どもを憤り、若者を恐れる社会に

なっていくのである」

ここまで述べて、ブロンフェンブレンナー教授は、では一体われわれは具体的に何ができるかを語っています。彼は、大切な事はもう一度子ども自身の生活の中に人々を、そして人々の生活の中に子どもをとりもどすような生活のパターンに変えることであるといえます。「幼い子どもはわれらを導く」というイザヤのことは現代の私たちのことばに置きかえなければなりませんといえます。ソビエトやスカンジナビアでは、商業や工業の中にも子どもたちや子どものプログラムを組み入れて、そこに働く人々が子どもを知り、彼らと友だちになれるようにしていることを紹介し、教授の友人が同じような試みをデトロイト市で実行したことを語っています。

それはデトロイト市にある新聞社の仕事場の中に子どもを連れて来るのです。子どもはスラム街と中産階級の両方からで、白人も黒人もいます。最初は新聞社の人々はこの突飛な考えに教授の友人を疑ったようですが、一定の期間子どもがいた後で、いなくなってしまうたら寂しくなったと口々にいったそうです。彼はこの方法によって人々は子どもを再発見し、子どもも人々を再発見したと報告しています。

それからブロンフェンブレンナー教授は、他にどのような方法が問題解決のためにとられ得るか述べています。その中で彼

は商業、工業地域の近くやその中に保育所をつくる案を出しています。それは単に子どもを預かる場所を提供するというだけでなく、親にチャンスを与えるため、つまり中休みやお昼時に子どもたちを訪れ、話題にし、お互いに、お互いを再発見するためになるのです。彼は、企業はもともとと積極的に雇い人やその家族のことを考えなければならぬことを説いています。それから新しいタイプのテレビ番組が編成されることが是非とも必要であるといっています。その中では、みる人は単に傍観者でなく、さまざまな社会の、あるいは家庭の役割を含むようなものが望ましいのです。こわされていくのは、家族でも人々でもなく、本当は彼らに対する社会の援助なのだといえます。さらにもう一度、年上の者が幼き者にとっていかによきお手本となるか説き、その中で注意しなければならぬことは、子どもといかに長い時間を過ごすかではなく、その時間がどのように費やされたかであると、警告しています。ことに日常生活の中で母と子のやりとりは大切であるといっています。

最後に、ブロンフェンブレンナー教授は、すべて彼が今まで述べてきたことは実際に努力してやろうとした社会にのみおけるので、現実には気づき、もつと子ども、いえ人間そのものを目をむけることにより、アメリカの子どもの現在と、またアメリカという国の未来があるのだと結んでいます。

現代の私どもの生活、そして子どもたちの生活の中から失われつつある大切なものがいろいろあるが、物的な環境の中からその一つをとれば、木材の建物や家具である。今月号の山本孝氏を囲む懇談会では、新しく学ぶところが数多くあった。木の床や木のいすは、冬暖かく夏涼しく、体の湿気を吸って人の健康のみでなく、気持ちに落着きを与えるということ、幼稚園の環境づくり、新築、改築のときなど、考慮せねばならぬことがいろいろ示唆されている。先日も、幼児用の木製のいすをそろえたいと思い、業者に注文したが、どこでも量産していないということに驚いた。子ども心に落着きを与えたいと思えば、パイプ製ビニールばりのいすよりも、木のいすがはるかにまざっていることは、うなずける。幼児の生活が快くなるように、木のいすが再び量産されて簡単に手に入るようになることを望みたい。

現代の生活の中から失われつつあるもののもう一つは精神的なもので、空

想や想像の生活である。子どもたちは一枚の紙きれ、一片の木片を、生きていくののように話しかけたり動かしたりしてあそぶ。お人形を自分自身のようにかわいがる。以前に番町幼稚園におられた徳久先生からうかがったことであるが、先生の若いころの毎年の仕事の一つは、担任の子どもたちの一人ひとりに、その子のお人形を作ってあげることだったという。いまの人形は合成樹脂で作られており、修理もできないし、手もぎれたりよごれたりすると、母親はどどん捨ててしまう。人形に対する子ども達の愛着、手がとれてしまった子どもの悲しみに気がつかないかのようである。子どもの心もまた摘みとられてしまう。現代の忙しい生活の中で、子どもには人間らしいゆとりを与えるようにせねばならないし、幼稚園が考えねばならぬ課題であると思う。

(津守)

今月号の巻頭は、お茶の水女子大学の現学長、谷田閼次氏に書いていただいた。谷田先生は、服飾美学の専攻の学者である。

幼児の教育 第七十一巻 第十号

十月号 定価一〇〇円

昭和四十七年九月二十五日印刷
昭和四十七年十月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

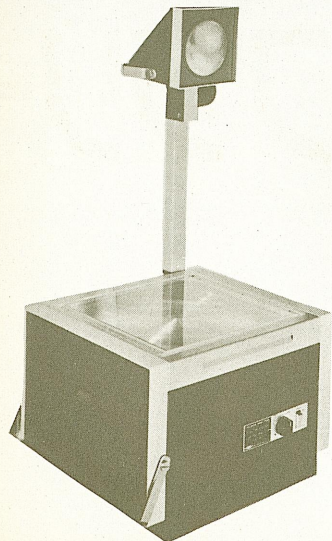
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いたします

フジックス

OHP 700



本体 ————— 63,000円

別売付属品

フジックスロールキャリア ——— 4,900円

フジックスプロジェクションランプ — 3,500円

《仕様》

レ ン ズ f=350mm 2枚構成

投 影 距 離 1.5m~3.0m

電 源 コード 本体固定式長さ5mコードポケットに収納

寸 法 ・ 重 量 360×310×560(映写時740)mm・9kg

《教育的特性》

- 明かるい部屋で、鮮明に投映できます。
- 近距離から大きな映像が得られます。
- 説明者は学習者と向かいあって、資料を提示できます。
- 学習のねらいに既したTPの自作が容易です。
- 操作がきわめて簡単です。

第1巻～第4巻
好評発売中



いきもののせかいがよくわかります!!

キンダーライブラリー 全6巻



★全巻予約特価セール実施中

予約受付 締め切り迫る!!

全6巻予約注文(10月31日まで)された方に限り
特価1,800円

- ① どうぶつ ② こんちゅう ③ とり
④ さかな かい —以上既刊
★⑤ しょくぶつ ★⑥ りょうせい・はちゅう
★は未刊

幼児むき 各32頁 多色刷
各330円/全6巻 定価1,980円

●お申し込みはフレール館支社、支店、出張所、代理店へどうぞ

発行 フレール館